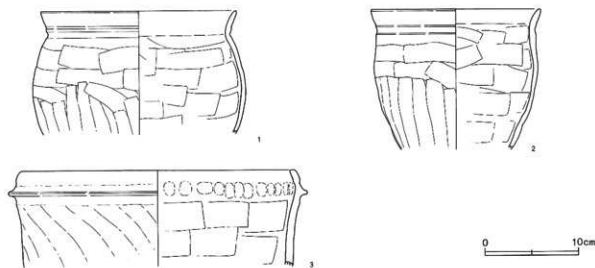


第34図 古代土壙出土遺物



壙と第7・25号土壙の2件にすぎない。図示可能であったのも土師器甕2点・土師質の羽釜1点の3点のみである。土師器甕は第7・25号土壙、土師質羽釜は第12号土壙から出土した。土師器甕1はやや丸脚になるもの、2は長脚甕であろう。細部の違いはあるが、口縁部直下にゆるい沈線を入れるような手法をとって小さな段を作るのはやや異色で、住居跡や土器焼成遺構から出土した甕と異なる趣きの甕である。古い段階には見受けられないこの手法の甕は新しい段階に属すると

(4) その他

この項では中世期の遺構と考えられる第1号溝跡から出土した須恵器杯について述べる。

暗橙褐色とでも表現すべきくすんだ赤い色調に焼けており、焼成は良好であるが、ややあまい。ロクロ調整はきっちりしており、ロクロ回転糸切り離し未調整の底面はやや大きい。体部下端で若干屈曲するが、体部から口縁部の立ち上がりは直線的である。器肉はやや厚めである。

考えられよう。

第12号土壙の土師質羽釜は顕著なロクロ調整の痕跡がなく、ヘラケズリ後ナデという調整によっているようである。口縁部内面には指押さえによると思われる凹凸も目立ち、胴部内面は土師器甕と同様のヘラケズリ・ヘラナデである。焼成の質が土師質というだけでなく、調整手法も土師器的であり、第1号住居跡のような須恵質のきれいな羽釜よりも新しい段階のものと考えてよいのではなからうか。

口径・底径・器高の比率から考えると9世紀半ばから後半あたりの土器として考えることができそうであり、本遺跡の古代の遺物としては最も古いものになるかもしれない。遺構に伴う確証はないが、溝跡に混入したにしては残存率が高い。この溝跡が古代にも生きていたかもしれない可能性を残しておくべきかもしれないが、遺構の時期の決め手にすることは保留しておくことにする。

古代土壙・その他の古代出土遺物観察表 (第34・35図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	出土位置	備考
1	甕	(21.0)	(13.0)		ABCG1	A	C	10	SK7 SK25	黒斑あり
2	甕	(18.0)	(14.8)		ABC1	A	C	20	SK7	内外面一部黒化 黒斑あり
3	羽釜	(29.3)	(10.1)		ACEFG1	B	B	5	SK12	黒斑あり 歪みあり
35図	杯	(12.2)	3.5	7.0	CFG1	A	B	60	SD1	赤焼き

第35図 その他の古代の
出土遺物



(1) 土壌 (第35~37図)

中世以降と考えられる土壌は、古代の土壌のような散在的に分布するものは少なく、B区中央部の第1・4号住居跡の東方の7基、C区の4基のみで、残る25基はB区南西端部の柱穴群および第2号溝跡が形成された第1号土壌

第1号土壌は、C区東端の第2号土壌の南40cmの位置に隣接して所在していた。長径1.07m、短径76cm、深さ10cmを測る、不整楕円形の土壌である。主軸方向は第4号土壌

第4号土壌は、第2号土壌の北西約2m、第3号土壌の北東約2mに位置し、C区の土壌群中ではやや北寄りの位置である。長径1.07m、短径93cm、深さ15cmを測る、楕円形の土壌である。主軸方向はN-9.5°-第5号土壌

第5号土壌は、第3号土壌の北西約2.5m、第4号土壌の西約4mに位置する。東壁南端部に小さな突起をもち、北壁が斜めになる不整楕円形を呈する土壌で、第6号土壌

第6号土壌は、第5号土壌の北約2.5mにあり、C区の土壌群中では最も北に位置する。長径98cm、短径65cm、深さ13cmを測る、不整楕円形の土壌である。主軸方向は第8号土壌

第8号土壌は、古代の第25号土壌の西端部に重複して検出された。この位置はB区の中・近世土壌群の南東端部にあたる。長径1.18m、短径93cm、深さ13cmを測り、皿状の掘り込みを呈する不整楕円形の土壌である。第9号土壌

第9号土壌は、第8号土壌の北約30cmの位置にあり、やはり第25号土壌の北西部に重複している。東の立ち

2 中・近世

折原石道遺跡においては、平安時代の遺構の一つのまとまりがあり、遺跡全体の性格を物語る要素も多いのであるが、中世以降の時

期においても、柱穴群・溝跡・土壌群を中心とした一定の遺構形成が認められた。

しかし、遺物の総量としては少なく、どのあたりの時期に遺構形成の中心時期があったかは判断が困難である。以下に個別に述べるが、遺構ごとの時期については想定可能なものだけ記述する。それ以外は、中・近世の幅の中で把握しておきたい。

れた区域の周辺に集中している。遺物が少ないので、確実ではないが、中世の建物群の形成に付随する不要物廃棄用の土壌や、場合によっては墓塚と考えられるものも含まれているかもしれない。

はN-20.5°-Wで北北西である。覆土には焼土粒・炭化物が少量含まれる。墳底面は平らであり、やや北に傾斜している。

Eで、北からわずかに東に振れている。墳底面はおおよそ平らで、わずかに凹凸がある程度である。覆土には焼土粒・炭化物が少量含まれる。

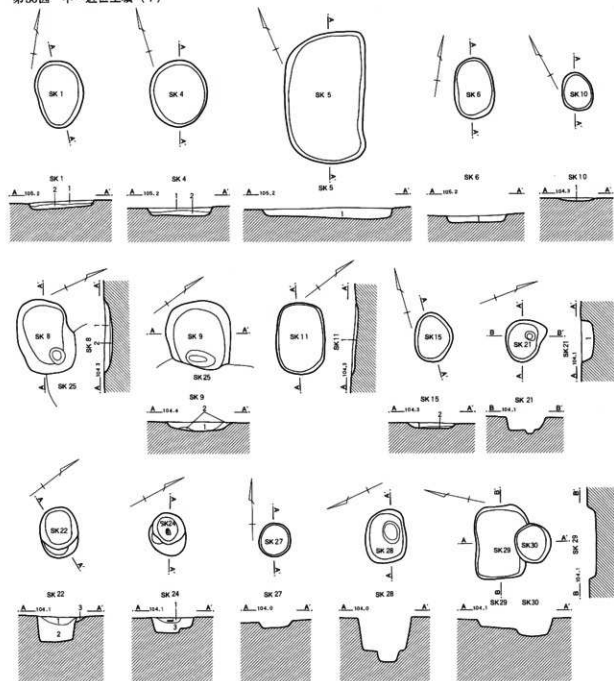
長径2.1m、短径1.3m、深さ19cmを測る。主軸方向はN-23°-Eで、北北東である。墳底面は平らである。覆土には焼土がほとんど含まれない。

軸方向はN-14°-Wで、北よりやや西に振れている。墳底面は平らであり、覆土には焼土が少量含まれる。

る。東壁付近に長径27cm、深さ17cmのビット状掘り込みをもつ。主軸方向はN-79°-Wで、東西方向に近い。覆土には少量の焼土・炭化物と多量の小礫を含む。

上がりが不明瞭であるが、長径約1.1m、短径1.05m、深さ15cmを測る、不整楕円形の土壌と思われ、皿状の

第36図 中・近世土坑 (1)



SK 1

- 1 10Y R 3/3 暗褐色 粘土粒・炭化物粒少量含む。
- 2 10Y R 6/4 におい黄褐色 粘土粒少量含む。

SK 4

- 1 10Y R 3/3 暗褐色 粘土粒・炭化物粒少量含む。
- 2 10Y R 4/3 におい黄褐色 粘土粒少量含む。

SK 5

- 1 10Y R 3/3 暗褐色 粘土粒少量含む。

SK 6

- 1 10Y R 3/3 暗褐色 粘土粒少量含む。

SK 8

- 1 10Y R 3/3 暗褐色 粘土粒・炭化物粒少量、小礫少量を含む。
- 2 10Y R 5/4 におい黄褐色 粘質。

SK 9

- 1 10Y R 3/3 暗褐色 小礫少量を含む。
- 2 10Y R 2/5 黒褐色 粘土粒少量、小礫中々多く含む。

SK 10

- 1 10Y R 2/3 暗褐色 炭化物粒中々多く含む。

SK 11

- 1 10Y R 2/3 暗褐色 小礫少量を含む。

SK 15

- 1 10Y R 2/3 黒褐色 炭化物粒・小礫中々多く含む。
- 2 10Y R 4/4 褐色 小礫中々多く含む。

SK 21

- 1 10Y R 4/6 褐色 粘土粒・炭化物粒・炭化物粒少量含む。

SK 22

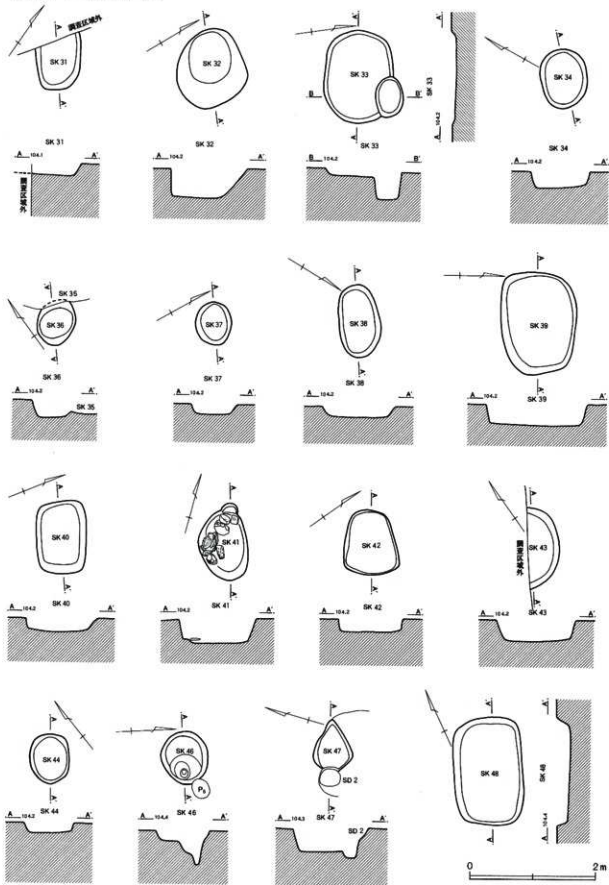
- 1 10Y R 3/3 暗褐色 粘土粒・炭化物粒少量含む。
- 2 10Y R 3/2 黒褐色 炭化物粒中々多く含む。
- 3 10Y R 4/3 におい黄褐色 炭化物粒少量含む。

SK 24

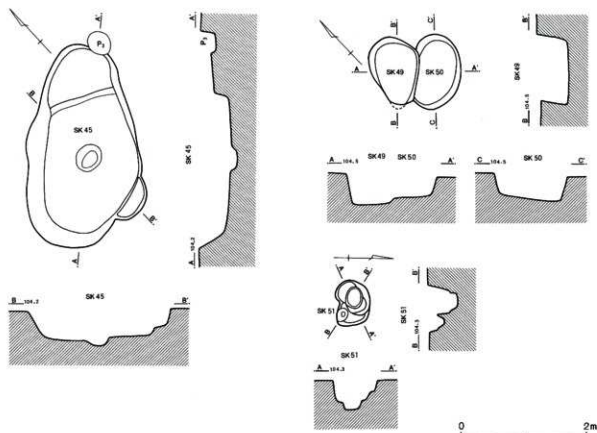
- 1 10Y R 3/2 黒褐色 炭化物粒少量、小礫少量を含む。
- 2 10Y R 4/4 褐色 小礫少量含む。



第37图 中·近世土壤(2)



第38図 中・近世土壌 (3)



掘り込みである。第25号土壌際の墳底面には長径50cm、短径25cm、深さ23cmの楕円形の掘り込みがある。主軸

第10号土壌

第10号土壌は、第9号土壌の北西10cmの位置に隣接して検出された。長径63cm、短径50cm、深さ5cmの倒卵形の小さな土壌で、浅い皿状の掘り込みを呈している

第11号土壌

第11号土壌は、第10号土壌の北90cmの位置にある。長径1.04m、短径78cm、深さ4cmを測る、楕円形の浅い土壌である。主軸方向はN-53.5°-Wで、北西で

第15号土壌

第15号土壌は、第11号土壌の西北西約3m、古代の第14号土壌の南西約1.2mの位置にある。長径80cm、短径62cm、深さ10cmを測り、倒卵形を呈する。主軸方

第21号土壌

第21号土壌は、第1号住居跡の東約9m、古代の第18号土壌の北1.8mの位置にある。長径68cm、短径65cm、深さ22cmを測り、楕円形の一部が三角形に突出する不

方向はN-62.5°-Wで、西北西である。覆土には小礫が多量に含まれる。

る。主軸方向はN-10.5°-Eで、北よりやや東に振れている。覆土には炭化物がやや多く含まれる。

ある。墳底面は平らであるが、地形に沿って北西に傾斜している。覆土には小礫が多量に含まれる。

向はN-12°-Eで、北よりやや東に振れている。墳底面は平らである。覆土には小礫がやや多めに含まれている。

整形の土壌である。主軸方向はN-67°-Wで、西北西である。北壁に近い墳底面に長径17cm、深さ7cmのビット状掘り込みをもつ。覆土には粘土や炭化材等を

少量含む。

第22号土壌

第22号土壌は、第1号住居跡の東南東約7m、第21号土壌の西南西約1.5mの位置にある。長径82cm、短径63cm、深さ40cmを測る楕円形の土壌で、掘り込みは垂直に近い。東壁には長さ40cm、幅10cm、壙底面から

第24号土壌

第24号土壌は、第1号住居跡の北東コーナーから南東に約1.4m、第22号土壌の西北西4.7m、古代の第23号土壌の北20cmに隣接した位置に所在していた。長径70cm、短径59cm、深さ24cmの楕円形の土壌で、東壁に

第27号土壌

第27号土壌は、土壌全体の中で最も北に位置し、第4号住居跡の北東コーナーから東に約6.7mの位置に検出された。長径55cm、短径52cm、深さ10cmを測り、

第28号土壌

第28号土壌は、第27号土壌の南4.7mの位置にある。長径85cm、短径65cm、深さ53cmを測る、不整楕円形の深い土壌である。主軸方向は $N-68.5^{\circ}-W$ で、西北西である。壙底面は平らだが、長径37cm、短径27cm、

第29号土壌

第29号土壌は、第1住居跡北東コーナーから東北東に約9.5m、第28号土壌の南南東約4.2mの位置にある。南壁中央付近に第30号土壌が重複している。長径1.15

第30号土壌

第30号土壌は、長径64cm、短径59cm、深さ26cmを測る、やや小さめの不整形の土壌である。主軸方向は

第31号土壌

第31号土壌はB区西壁際へ検出され、B区南西端部の中・近世土壌群の中では、最も北にある。第1号住居跡の南西11.4m、土器焼成関連遺構の西南西約5mの位置に所在している。土壌全体の2～3割近くが調査区の壁の外に出てしまっているため、主軸方向の長

第32号土壌

第32号土壌は、第1号住居跡の南南西13m、第31号土壌の南南東1.4mの位置にある。長径1.3m、短径1.04m、深さ47cmを測り、倒卵形を呈する。主軸方向

の高さ32cmのテラスがある。主軸方向は $N-58^{\circ}-W$ で、西北西に近い。壙底面は平らだが、わずかに西に傾斜している。覆土には焼土が少量、炭化物がやや多量に含まれている。

長さ50cm、幅15cm、壙底面からの高さ6cmのテラスがある。主軸方向は $N-69^{\circ}-W$ で、西北西である。壙底面は平らである。覆土には小礫が多量に含まれる。

不整形を呈する。主軸方向は $N-13^{\circ}-E$ で、北よりやや東に振れている。壙底面は平らであるが、やや北に地形に沿って傾斜している。

壙底面からの深さ19cmのビット状掘り込みがあった。浅めの土壌が主体の折原石道遺跡としては深い土壌である。

m、短径87cm、深さ15cmを測る、不整楕円長方形の土壌である。主軸方向は $N-79^{\circ}-E$ で、東北東よりやや東西方向に近い。壙底面は平らである。

$N-75^{\circ}-E$ で、東北東よりやや東西方向に近い。掘り込みは比較的直線的であり、壙底面は平らである。

さがわからないが、検出された長径の長さは約80cm、短径73cm、深さ30cmを測る、不整楕円形の土壌である。主軸方向は $N-37^{\circ}-E$ で、北東に近い。壙底面は平らであるが、やや南東に傾斜している。

は $N-62.5^{\circ}-W$ で、西北西である。西壁は直角に近い急な角度、東壁は 45° に近い傾斜で掘り込まれており、壙底面は平らである。

第33号土壌

第33号土壌は、第32号土壌の南約25cmに隣接して所在する。長径1.49m、短径約1.1m、深さ13cmを測る、楕円形の土壌である。北壁の北東部に長径65cm、短径

第34号土壌

第34号土壌は、第33号土壌の東約50cm、第32号土壌の東南東約80cmに隣接し、この3基で一群を形成しているように見える。長径96cm、短径74cm、深さ26cmを

第36号土壌

第36号土壌は、古代の第35号土壌の南壁西部に重複しており、第33号土壌の南南東約1m、第34号土壌の南南西1.4mの位置にある。長径75cm、短径60cm、深さ28cmを測る、楕円形の土壌である。主軸方向はN-

第37号土壌

第37号土壌は、第34号土壌の東南東約2.4m、第36号土壌の東北東約2.8mの位置にあり、古代の第35号土壌の北東約65cmに隣接する。長径71cm、短径59cm、

第38号土壌

第38号土壌は、第37号土壌の南東約1m、古代の第35号土壌の東約1m、土器焼成関連遺構の南約3.3mの位置にある。長径1.18m、短径68cm、深さ17cmを測

第39号土壌

第39号土壌は、第38号土壌の南西約2.2m、第36号土壌の南南東約2.3m、古代の第35号土壌の南約1.5mの位置にある。長径1.64m、短径1.21m、深さ33cmを

第40号土壌

第40号土壌は、第36号土壌の南西50cmの位置に隣接し、第39号土壌の北西約2m、第33号土壌の南1.4mの位置にある。長径1.15m、短径82cm、深さ25cmを測

第41号土壌

第41号土壌は、B区の西壁付近、第40号土壌の北西約2.8m、第33号土壌の西南西約2.4mの位置にある。長径1.14m、短径79cm、深さ40cmを測る、不整楕円形の土壌である。主軸方向はN-22°-Wで、北北西である。北端部には径28cm、深さ30cmのビット状掘り込

第42号土壌

第42号土壌は、第41号土壌の南約40cmに隣接してお

43cm、深さ43cmのビット状掘り込みが重複している。主軸方向はN-79°-Wで、西北西よりやや東方向に近い。壙底面は平らである。

掘り、楕円形を呈する土壌である。主軸方向はN-48°-Eで、北東である。壙底面は平らであるが、わずかに北東に傾斜している。

53°-Eで、北西である。掘り込みの角度はやや急であり、壙底面は平らであるが、わずかに北に傾斜している。

深さ15cmを測る、楕円形の土壌である。主軸方向はN-67°-Wで、西北西である。壙底面は平らである。

り、不整楕円形を呈する土壌である。主軸方向はN-52°-Eで、北東よりやや東に振れている。壙底面はおおよそ平らで、中央がわずかに低くなっている。

測る、不整楕円形の土壌である。主軸方向はN-85°-Eで、ほぼ東方向である。壙底面はおおよそ平らで、わずかに東に傾斜している。

り、不整隅丸長方形を呈する土壌である。主軸方向はN-71°-Wで、西北西である。壙底面はおおよそ平らであるが、わずかに中央が低くなっている。

みが重複している。また、壙底面付近には片岩の礫11点と石臼が並べられるようにして出土したが、意図的配列なのかどうかは判然としない。壙底面は平らであり、掘り込みの角度は急である。

り、第40号土壌の西約2.7mの位置にある。長径1.06m、

短径89cm、深さ22cmを測り、不整形丸台形とも呼ぶべき不整形を呈している。主軸方向はN-58°-Wで、

第43号土壌

第43号土壌はB区西壁際に検出され、第42号土壌の西約50cm、第41号土壌の西南西約1.2mの位置にある。主軸方向で見て約半分がB区西壁の外に出てしまっているので長さ・幅等は推定にならざるをえないが、長径1.31m、検出部分の最大幅は50cm、深さ33cmを測る。

第44号土壌

第44号土壌は、第43号土壌の南1.3m、第42号土壌の南西約1.8mの位置にある。長径80cm、短径64cm、深さ17cmを測り、不整形円形を呈する土壌である。主

第45号土壌

第45号土壌は、B区西壁から2.5mの位置に検出され、第44号土壌の東60~70cm、第42号土壌の南約1mの位置にある。長径3.25m、短径1.85m、深さ52cmを測り、不整形円形を呈する大きな土壌である。中世以降の土壌の中では最大規模である。主軸方向はN-44°-Eで、北東である。北寄りの部分に長さ1.08m、幅75cm、壇底面からの高さ27cmのテラスがある。南壁

第46号土壌

第46号土壌は、第45号土壌の南約2.4mの位置にある。東端部には第25号柱穴が重複している。長径86cm、短径76cm、深さ17cmの不整形円形の土壌である。主軸方向はN-73°-Eで、東北東である。東壁寄りの部分に長径52cm、短径42cm、壇底面からの深さ21cmの土壌

第47号土壌

第47号土壌は、第45号土壌の南東約2.8m、第46号土壌の東北東約2.3mの位置にあり、第2号溝跡の北西部分に重複している。西に径46cm、深さ47cmのビット状掘り込みがあり、長径が確定できないが、残存部

第48号土壌

第48号土壌は、第46号土壌の東南東3.4m、第47号土壌の南南東2.6mの位置にある。長径1.73m、短径1.1m、深さ22cmを測る、隅丸長方形の土壌である。

第49号土壌

第49号土壌は、第48号土壌の南南東約1.3mの位置

西北西よりやや北に振れている。壇底面は平らであり、わずかに北西に傾斜している。

主軸方向はB区西壁と同一方向と考えてよければN-32.5°-Eで、北北東よりやや東に振れる方向となる。壇底面は平らであるが、わずかに中央が低くなっている。

軸方向はN-34.5°-Eで、北東よりやや北に振れている。壇底面は平らであるが、わずかに南に傾斜している。

のやや西寄りの部分には、長さ72cm、幅20cm、壇底面からの高さ22cmのテラスが壁の外に突出する形態で取り付いている。東壁には第3号柱穴が重複している。また、土壌中央部の壇底面には径45cm、深さ15cmのビット状掘り込みがある。壇底面はおおよそ平らであるが、北の方向にわずかに傾斜している。この土壌から温石が出土している。

状掘り込みがあり、さらに、その中に径15cm、深さ16cm（遺構確認面からの通算の深さ54cm）のビット状掘り込みがある。第46号土壌自体の壇底面は平らに近いが、下の土壌状掘り込みは漏斗状である。

の長径80cm、短径64cm、深さ36cmを測る。形態も不整形で、菱形に近い形である。主軸方向はN-73°-Eで、東北東である。掘り込みは急な角度であり、壇底面は平らである。

主軸方向はN-21°-Eで、北北東である。壇底面は平らであるが、北の方向にわずかに傾斜している。

にある。第50号土壌も東隣りに所在しており、第50号土

墳の西壁を第49号土壌の東壁が破壊するような形で重複している。長径1.2m、短径80cm、深さ50cmを測る、倒卵形の土壌である。主軸方向はN-31°-Eで、北北東よりやや東に振れている。掘り込みの角度は急で

第50号土壌

第50号土壌は、第48号土壌の南南東約1.9mの位置にある。B区土壌群の最南端の土壌である。西壁が第49号土壌に壊されているため、短径が判然としない。長径1.2m、残存部の短径約70cm、深さ45cmを測る、

第51号土壌

第51号土壌は第45号土壌の南東約50cmの位置に隣接して検出された。第46号土壌の北1.5m、第47号土壌の西北西1.5mの位置である。長径73cm、短径48cmの不整楕円形の土壌である。主軸方向はN-80°-Wで、西よりやや北に振れている。

複数の小土壌の重複のように見えるため、深さは、西寄りにあるビット状掘り込みの底面をとれば47cm、最西端部の立ち上がり付近をとれば34cmとなり、東寄りの、古い浅い土壌を想定できそうな部分では17cmで

(2) 溝跡 (第39図)

第1号溝跡

折原石道遺跡の溝跡は2条確認されている。1つはB区北寄りの住居跡群の位置付近で、遺跡を東西に横断する第1号溝跡、もう1つはB区南部の土壌群・柱穴群中に検出された第2号溝跡である。これらは、形態も規模も検出された延長距離も異っており、遺構形成時期も性格もまったく別の時期に関わるものとして考えるべきであろう。

第1号溝跡の場合、前述してある平安時代の須恵器坏(第34図参照)と常滑焼等の中世陶器類の双方ともが出土遺物として検出されているので、この点から見る限りでは遺構の形成が古代になるのか、中世になるのか半断がむずかしい。今回の報告書では、出土量の多い中世遺物を優先と見ておきたいことに加え、溝の掘り込みの様相が灌漑用水目的の溝のそれとは程遠いこと、古代の官衙遺跡・豪族居館跡等の区画溝のような企画性もないこと等々から、中世の遺構として取

あり、南壁は最大7cm分オーバーハングした形に掘られている。墳底面は平らであるが、わずかに西に傾斜している。

楕円形の土壌である。主軸方向はN-46°-Eで、北東である。墳底面は平らであるが、南西にかなり傾斜している。

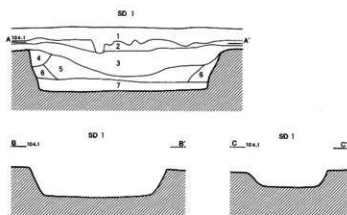
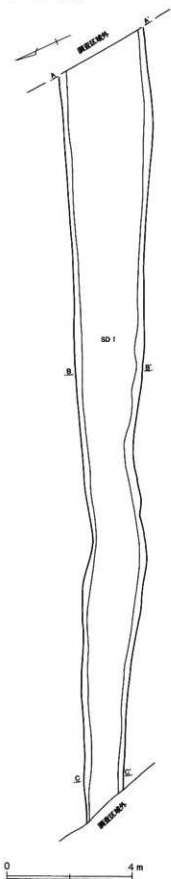
ある。不整楕円形の土壌2つの重複として考えれば、深さ34cmの土壌と深さ17cmの土壌のうち、深い方の土壌に深さ47cmのビット状掘り込みが入っている、ということになるわけである。さらに、南東端部には径23cm、深さ27cmのビット状掘り込みがある。掘り込みが複雑になっているため、墳底面の状態は半断がむずかしいが、それぞれだいたい平らだったようであり、掘り込みの角度も急であったようである。

り上げておくことにする。

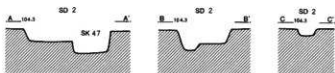
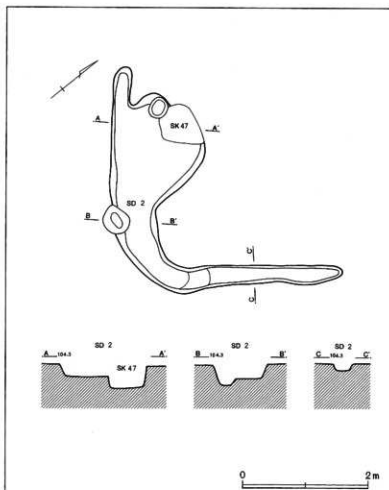
第1号溝跡が検出されたのは、遺跡全体の中央部分でB区の中央よりやや北寄りになる部分であり、B区西壁では第2号住居跡の南約6m、第4号住居跡の北約7.6mの位置である。直接的には関係はないと思いが、住居群を南北に二分する位置にあたる。

溝の形態はほとんど直線の溝であり、溝の掘り込みのおおよその中軸線を引くと、その方向はN-65°-Wの西北西-東南東方向となる。調査区内で検出した延長距離は約24mである。溝の幅はあまり一定していないようであるが、最小幅は西壁部分(C-C'断面の付近)の1.26m、最大幅は東壁から約2.5m離れた地点の2.91mであり、西壁から東壁に向かってやや幅広になる傾向がある。溝の掘り込みの角度はやや急であり、溝底面も幅広に見える印象がある。ちなみに、底面の幅は、溝の幅とはほぼ同じ位置に最大値・最小値

第39図 溝跡



- SD 1
- 1 10YR 5/2 灰黄褐色 耕作土。
 - 2 10YR 5/3 红土状・炭化物粒少量含む。
 - 3 10YR 3/3 暗褐色 炭化物粒少量含む。
 - 4 10YR 3/3 暗褐色 焼土粒・炭化物粒少量含む。
 - 5 10YR 4/3 红土状・炭化物粒少量含む。
 - 6 10YR 4/4 褐色 炭化物粒少量含む。
 - 7 10YR 3/3 暗褐色 焼土粒・炭化物粒少量含む。



があるが、最大2.45m、最小83cmである。溝の深さは遺構確認面の凹凸に左右されてしまう面もあるかもしれないが、西壁付近で26cm、東壁の位置で65cmである。ただし、溝底面の標高から考えると、もう少し違った様相もある。溝底面の標高は、最高点で標高103.4m、最低点で標高103.3mと約10cmの差があるが、東壁と西壁の中間のあたりが最も高く、東壁・西壁にそれぞれ向かって少しずつ低くなっていくことが確認された。

土層断面から、第1号溝跡の埋没の状況を見ると、まず、暗褐色土が10~20cm程度平らに堆積し、その後やや黄色っぽい土が側面から徐々に入り込んで、その上に暗褐色土が分厚くレンズ状に堆積して、溝の掘り

第2号溝跡

第2号溝跡は、B区南西端部に近いO-3~O-4グリッドに所在していた。この溝跡の周辺は柱穴群の分布密度が最も大きい区域である。

溝の形態はL字形を呈しており、N-35.5°-Eの方向に向かう北東方向部分約3.3m、N-52°-Wの方向に向かう北西方向部分約3.2mの合計6.5m程度の長さがある。この2方向部分の角度は直角に近い。L字の屈曲部はゆるく曲っており、コーナー部分は角になっていない。北東方向部分は幅狭で浅く、幅30~35cm、深さ10cm程度であるが、コーナー部分の手前付近で33cmの幅で11cm下がゆるい段がある。北西方向部分は土壌の重複と思われるほど内側にふくらむように変形しており、コーナー出口部の幅約70cm、最大幅の部分で1.52m、末端付近で28cmの幅になっている。深さはコーナー出口部付近で24cm、最大幅部付近の第47号土壌重複部分では20cmである。

なお、北西方向のコーナー出口部付近の外側立ち上

(3) 道路状遺構 (第40図)

道路状遺構は、北のA区のやや南寄りの部分で確認された。この調査区の北寄りの部分は南のB・C区に主体的に遺構形成が進んでいた時期に近い段階では河床面になっていた時期がありそうであり、遺構確認面のところどころには、川の底にたまるような小礫のままとまりが確認された。また、地山もやや砂質の土であ

込みのほぼ全体を埋めている。また、溝底面は礫層であった。上層から下層まで焼土粒や炭化物粒を少量含むという状態であり、基本的に水性の堆積土ではないと考えることができる。つまり、この溝跡は空堀ではなかったかと思われる。

この溝跡の性格を決める要素は乏しいと言わざるをえないが、少なくとも、直線的に掘られていること、溝跡と同時期あるいは比較的近い時期の遺構が溝跡以北に認められないことから、南方の中世の遺構群密集区域を囲う、あるいは区画する意図で掘られていた可能性があると見ておきたい。

がり部に径47cm、深さ32cmのビット状掘り込み、最大幅部の第47号土壌西側にもビット状掘り込み(第47号土壌の項参照)がある。

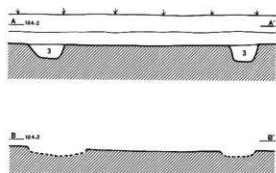
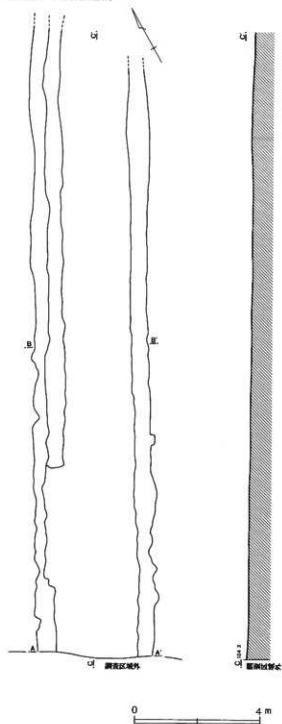
この溝跡の性格や機能については、周囲の柱穴群が掘立建物跡として把握されていないので、確定には言えないのであるが、これらの柱穴群から考慮される中・近世の建物群の区画溝あるいは雨落ち溝の一部ではないかと想像される。柱穴群の密度の最も大きい部分とこの溝跡の位置・方向性が適合していることを根拠に考えた。建物のエリアを第2号溝跡と第35号土壌の間にとれば、東西約7m、南北約4m程度のものが存在した可能性があり、建物群の中心建物を区画したと考えることができる。しかしながら、区画溝を有する建物としては小規模にすぎるので、可能性の一つとして指摘しておくに留めた。

ちなみに、遺物はほとんど検出されておらず、掘削された時期を確定するのは困難である。

り、B・C区の地山に比べて礫が混入する量も幾分多めである。

道路状遺構が検出されたのは、C-3、C-4、D-4、E-3グリッドであり、河床面の広がりや推定した区域よりは南側である。道路の方向はN-29°-Eで、北北東よりやや東に振れている。確認された長

第40図 道路状遺構



A区道路状遺構

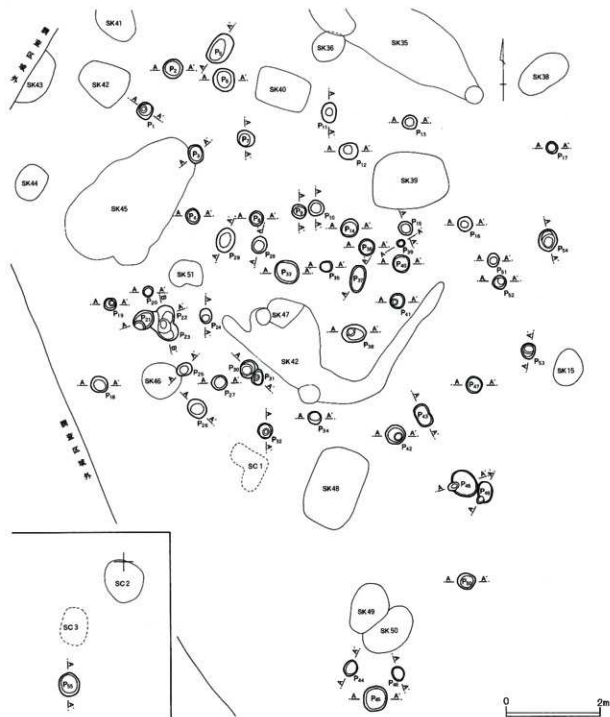
- 1 10Y R 5/2 灰黄褐色 耕作土。
- 2 10Y R 4/2 灰黄褐色 粘土粒・A軽石粒が今多く含む。
- 3 10Y R 4/3 濃い黄褐色 黄色土と黄褐色砂質土の混合。粘土粒少量含む。
- 4 10Y R 3/2 黒褐色 砂質。黄褐色土を多量に含む。堆山。

さは約20m、幅は側溝の外側を測ると3.7～4 m程度、内側を測ると2.6～2.7mである。

側溝は幅・深さともにあまり安定しておらず、調査区西壁部分で確認された西側溝の幅60cm、深さ23cm、東側溝の幅47cm、深さ26cmは最深部であり、北に向かって浅く、凹凸の激しいものになっていくようである。

写真の方がわかりやすいが、道路状遺構が確認されなくなる部分のやや手前からは側溝自体は深さ数cmと申し訳程度に見えるだけになり、小穴が多数見える。調査区西壁から約6 mの位置から長さ約14m分の西側溝は倍の幅つまり2本分になっているが、その中央にわずかな盛り上がりが見られる部分もあり、側溝が掘

第41図 柱穴



り直されていると解釈しておく。西側溝は内溝が幅37～65cm、外溝が幅13～62cm、東側溝は幅37～75cm程度であり、深さは平均10～15cm程度である。側溝間の道路面には特に硬化面のようなものは確認できなかった。硬化するほど人間や運搬用具の往来が繰り返される以前に廃絶してしまったのかもしれない。

ところで、直接的な関係はないと思うが、第1号

溝跡の方向と道路状遺構の方向はおおよそ直角になることが判明している。双方ともが生きている時期があるのだとすれば、この遺跡の遺構配置に何らかの計画性があったことを考慮する必要もあるかもしれないが、調査区が道路幅にすぎないため、これも可能性の指摘に留めざるをえない。

(4) 柱穴 (第41・42図)

柱穴については、すでに土壌や溝跡の項目で少しづつ触れてはいるが、ここでまとめて述べる。本遺跡で柱穴としたものは、注意深く見ていけば、平安時代に属するものも抽出できるかもしれないが、確実に伴う遺物はほとんどないので、便宜上すべて中世あるいはそれ以降の遺構と考えることにしたい。

柱穴は全部で55本が確認されているが、第55号柱穴を除く54本がB区南西端のN-3、N-4、O-3、O-4グリッドの南北約11m、東西約7mの区域に集中している。

集石遺構の項で後述する第55号柱穴は、深さ・径・掘り込みの特徴等から考えると、柱穴と考えることはむづかしく、集石遺構と同時期、あるいはそれ以前の平安時代に掘削されたかもしれない「土器焼成遺構」に関連する「土壌」として認識する方が正しいのではないかと思われる。そうすれば、残りの柱穴をまとまりのよい遺構群として考えることができる。また、第21・22・23号柱穴の重複はあまり整っておらず、第2・33・37号柱穴も十分な深さがいないため、柱穴とはいえないかもしれない。それ以外の大部分は、径・深さ・垂直に近い掘り込みの形態等が柱穴の要件を満たしていると考えられる。

本来的には、ほとんどの柱穴が獨立柱建物跡や欄列を構成するはずであるが、調査中には組合せを意識して掘り下げる余裕がなかった。この項で指摘するのはあまり確実とはいえないが、建物跡の可能性をあえて考えておきたい。

第3・4・28・38・41・16・12号柱穴の7本に関連

(5) 集石遺構 (第43図)

折原石道遺跡においては、時期・性格とも不明確な小規模の集石遺構が3基検出されている。2基はB区のおおの中央部に位置し、1基は中世以降の土壌群・柱穴群分布域であるB区南西端部に位置している。

集石遺構は、通常は数十cmから数m程度の規模で、屋外調理施設のような様相を示して検出され、縄文時代を中心とした時期の遺構である場合が多い。しかし、

一方で考えると、やや東西方向に長めの柱間をもつ3間×4間の東西棟(方向性は北西-南東方向)のような建物を復元して考えることができる。この場合は、北西方向に何度が建て替えがあった結果、第2号溝跡・第35号土壌・第45号土壌で囲まれている区域に柱穴が密集している説明がしやすい。

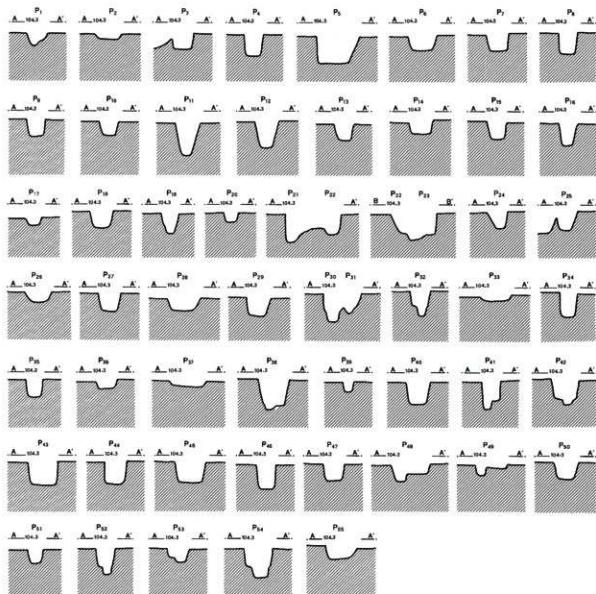
また、第42・43・47・53号柱穴等の東西の並びと、第13・16・51・52・53号柱穴等の南北の並びも、2間×3間あるいは3間×3間の建物跡の一部として考えることができるかもしれない。これ以外にも、建物跡の可能性を考慮すべきものはいくつか存在し、3棟の建物が建て替えを繰り返していたと考えるのが妥当なところである。柱穴の総数から考えても、同時存在で3棟分くらいが今回の調査区内におさまっていると考えられるのがせいぜいであり、ここから一定のまとまった大きな屋敷の風景を復元することはできず、本遺跡の東約100mの位置にある、鎌倉時代の館跡とされる折原堀之内遺跡に関連する屋敷跡という評価をこの遺跡に与えることは困難である。

ところで、第1・19・30・31・32・38・41・42・52・53・54号柱穴の11本には柱真状の小さな深い掘り込みが内部に伴っており、一見柱穴らしくない第48・49号柱穴の2本にも柱真風の小さなピットが確認されているので、これらはむしろ積極的に柱穴として認識すべきであろう。

ちなみに、個々の柱穴の計測値・留意点等は表にまとめたので、参照されたい。

本遺跡では、集石遺構周辺から出土した遺物には縄文土器等はなく、特に、第1号住居跡に比較的近いところに検出された第2・3号集石遺構の周辺からは住居跡・土器焼成関連遺構等と同様の様相を示す土器類の破片が少量出土した。これらの遺物は集石遺構に直接伴うものではなく、南側の平安時代の土壌群に関連する遺物の散乱したもので、あるいは本来は第1号住居

第42図 柱穴断面図



跡か土器焼成関連遺構に伴うものが何らかの原因で流出して、集石遺構周辺に遺棄されたものと思われる。

第1号集石遺構

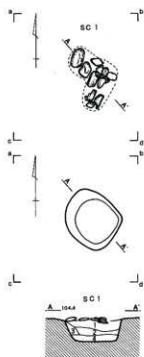
第1号集石遺構は、B区西南端部付近、第47号土壌の南2.4m、第46号土壌の南東1.7mの位置に検出された。第2・3号集石遺構までは約50mの距離がある。

この集石遺構の石の配列はやや開きの大きいL字形になっており、西寄りの方向をとる部分はN-53°-Wの方向性で長さ約80cm、幅40cm、東寄りの方向をとる部分はN-26°-Eの方向性で長さ約70cm、幅40cmであった。配列された石の数は15個であり、小石が若

以下、3基の概要を個別に述べる。

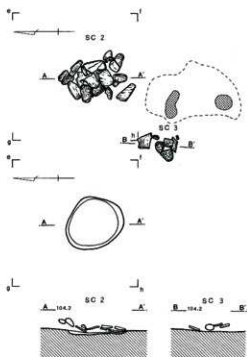
干量詰め込まれていた。使われている石は片岩系の厚みの薄い板石を主体としていたが、角がゆるくなっていたり、丸くなったりしたものも含んでいるため、河原から拾ってきたものがほとんどであろう。石は大きさも長径17~31cmくらいのものを主としているが、大きめの石の間には長径5~10cmくらいの小石を詰め込むように並べていた。3つの石が上下に重なっていた部分もあった。石の上面はほぼ全体が被熱のために赤

第43図 集石遺構



SC1

- 1 10YR 3/1 暗褐色 小礫多量・焼土粒・炭化物粒少量含む。
- 2 10YR 3/4 紅紫 炭化物粒少量含む。
- 3 10YR 3/3 暗褐色 粘質。焼土粒少量含む。
- 4 10YR 4/1 黄灰色 粘質。



SC2

- 1 10YR 3/3 暗褐色 粘質。焼土粒・炭化物粒多量を含む。



色化しており、火を受けたために割れてしまった石も数個あった。集石の下には長径92cm、短径80cm、深さ35cmの不整形円形の土壇があり、粘質のやや黒っぽい土で埋まっていた。ただし、この覆土には焼土・炭化物

第2号集石遺構

第2号集石遺構は、B区中央部やや南寄り、第1号住居跡の東約12m、第21号土壇の東2.3mの位置に検出された。

石は21個を並べており、小石を若干使用していた。第1号集石遺構に比べてやや石の上下の重なりが多く、石が密集しているような印象がある。やはり片岩系の板石を主体に長径約20~35cmの石を主体に並べ、隙間に長径5~10cmの小石を詰めるように並べていた。石の配列の方向性はほぼ座標北に等しく、石は長さ1.25m、幅83cmの範囲に配列されている。石の上面が被熱により赤色化し、割れているものが散見されるのも第1号集石遺構と同様であった。集石の下には土壇があったが、深さ5cmと浅く、焼土・炭化物が多量

物に少ししか含まれておらず、土壇の段階から火をたいていたことはなく、集石が配列された後に火を使用していた、と判断される。

に含まれる暗褐色土が堆積していたのは第1号土壇と少々異なっている点である。土壇は、長径98cm、短径83cmの大きさで、形態は倒卵形、主軸方向はN-38°-Wである。

この集石遺構の場合には、浅い土壇を掘った後、ここでも火の使用が行われ、その後それが埋没した後に石を配列してから火の使用があったことになる。周囲から出土した土器から考えると、下層の土壇は土器焼成遺構か、あるいはそれに関連した遺構になる可能性もあることになる。断面図を参照してもわかるように、第2号集石遺構の場合には、石が配列された標高と下層の土壇の確認面の標高との間に数cmの差があるので、土壇は平安時代、集石遺構は中世と考えておく

方がよいかもしれない。

第3号集石遺構

第3号集石遺構は、第2号集石遺構の南西に隣接している。この集石遺構はわずか6個の石で構成されており、その位置も、第2号集石遺構の最南西端の石から第3号集石遺構の最北端の石までは約60cmしか離れていないため、本来2つの集石遺構は同時期に同じ用途で構築された可能性もある。石の配列は若干まばらで、2個と4個に分かれているように見える。範囲は長さ65cm、幅40cmで、方向性はN-4°-Eである。やはり片岩系の板石を主体に並べ、石の表面は被熱で赤色化している。石の数が少ないので、上下の重なりは少ない。

第2号集石遺構の南側で第3号集石遺構の西側にある位置に機能不明の焼けた床面状の土が長径1.53

(6) その他

折原石道遺跡の出土遺物のうち中世以降と思われるものを第44・45図および図版24・25に示した。本来は土器類(第44図・図版24・25)

まず、カララケと呼ばれることの多い、土師質や酸化炭焼成の小皿を取り上げる。作図可能であったのは5点にすぎなかった。

第44図1は土師質の赤い焼きのものである。全体の40%程度の残存である。口径9.9cm、底径5.4cm、器高2.2cmを測る。底径が大きめで安定した器形である。底部はやや厚めの上げ底風平底で、体部は内彎気味に開いて立ち上がり、口唇部はわずかに外反するように作られ、丸い。全体をロクロ整形しており、底部内面には爪先による強いロクロ目が目立つ。外面の体部下半にはロクロ回転ヘラケズリを施したような痕跡も見え、ナデ消されている。底面にはロクロ回転糸切り離し痕跡が残る。胎土は細かく、破碎された片岩の粒子・石英・雲母等の混入物が目立ち、角閃石・白色針状物質等もあるが、少量である。焼成は良好であるが、やや軟らかい。色調は明赤褐色(5 YR 5/6)。第2・3号集石遺構周辺出土。

第44図2は、酸化炭焼成でやや白っぽい小皿である。

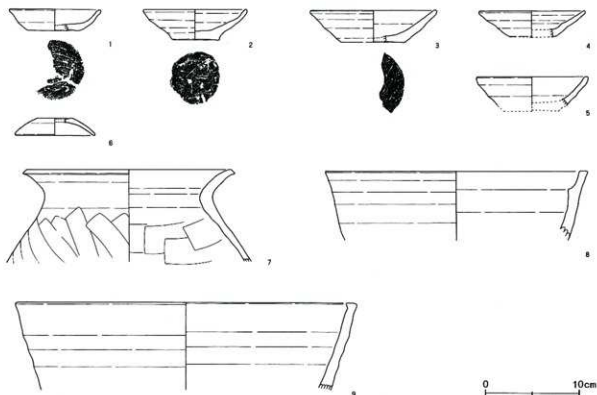
m、短径87cmの三日月形の範囲で確認され、大きさ45cm×20cmと30cm×24cmの2つの焼土塊もこの範囲に検出された。この床面状の土は、焼土・炭化物を取り除くように薄く掘り下げると、なくなってしまった。この範囲にはごく浅い土壌があったのかもしれない。そして第2・3号集石遺構がこの床面状の土に関連をもってたと想定することもできよう。さらに、第3号集石遺構の南70cmの位置には覆土に焼土・炭化物が含まれる第55号柱穴が所在していたが、長径50cm、短径44cm、深さ14cmを測り、柱穴というよりは土壌と認識すべき遺構である。これもあるいはこれらの集石遺構の下層遺構群との関連で理解すべきかもしれない。

各遺構の項で触れるべきであるが、量的には少量であるのでこの項でまとめて述べることにする。

残存率80%。口径11.2cm、底径5.1cm、器高3.2cmを測る。底径が小さいのに、やや器高が高い。底部は厚めで、体部はやや大きく開き、内彎しながら立ち上がる。口縁部は少し内側に曲げられる感じになり、口唇部の厚みはあまりない。底部がわずかに下に突出した印象になる器形である。全体をロクロ整形しているが、口縁部内外面がやや強めのロクロナデになっており、内面はこの強い調整のために凹んでいる。底面にはロクロ回転糸切り離し痕跡が残る。胎土は細かく、角閃石や黒色棒状の粒子を多量に含む。焼成は良好で硬いが、器表面は風化してザラザラである。色調は浅黄褐色(10 YR 8/3)。第41号土塊出土。

第44図3も酸化炭焼成の小皿である。残存率25%。口径13.6cm、底径6.8cmは復元値で、器高は3.4cmである。口径・底径はバランスがよく、体部は直線的に大きく開いて立ち上がり、口唇部は丸い。全体をロクロ整形しており、底部内面には爪先による強いロクロ目が目立つ。底面にはロクロ回転糸切り離し痕跡が残る

第44図 中・近世出土遺物 (1)



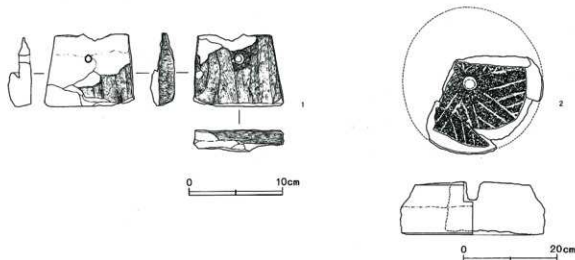
が、器表面が軟らかく、風化による摩滅のため外面の調整痕跡が不明瞭になっている。胎土は細かく、黒色粒子や土器片を粉砕したような赤褐色の粒子がやや多く含まれる。焼成は良好であるが、ややあまじ焼きのため器表面は軟らかい。色調は外面はにぶい橙色 (7.5 YR 4/7)、内面は褐灰色 (7.5 YR 5/1) である。第42号土壙出土。

第44図4・5は口縁部だけの破片で双方とも残存率は15%程度である。4は口径11.4cm、残存部高2.7cmである。体部は大きく開いて立ち上がり、口唇部は丸い。内面には段がある。胎土は細かく、角閃石・雲母・石灰質粒子・赤褐色粒子等が多く含まれる。焼成良好。色調は外面が暗褐色 (7.5 YR 3/3)、内面が明赤褐色 (5 YR 5/6)。第1号溝跡出土。5は口径12.2cm、残存部高2.8cmである。体部は大きく開いて立ち上がり、口唇部はやや細くなるが、丸い。胎土は細かく、石英・長石・雲母・角閃石・赤褐色粒子等を多量に含む。焼成良好。色調は橙色 (7.5 YR 6/6)。第1号溝跡出土。

次に灯明皿の蓋 (6) である。天井部径3.7cm、器高1.9cm、口縁部径8.6cmを測る。残存率は30%。ロクロ回転ヘラケズリで整えられた天井部は平らでやや凹んでいる。天井部から口縁部へは内彎気味に大きく開き、口唇部はやや尖る。全体をきれいにロクロ調整した後、内面に透明の釉をかけ、表面ガラス質に仕上げずる。胎土は緻密で、混入物は目立たないが、黒色微粒子が若干ある。焼成は良好で、硬い。色調は灰白色 (10 YR 8/2) だが、外面の口縁部付近は油煙で黒ずんでおり、外面全体がススで若干汚れ気味である。N-5グリッド出土。

次に在地系陶器の甕 (7) である。一見須恵器風であるが、焼成の印象や製作手法、器形の特徴などの点から中世陶器と判断した。土器の器高がよくわからないので、残存率も見積もれないが、仮に30cm内外の高さと考えれば全体の10~15%程度ということになる。口径22.8cm、残存部高9.7cm、胴部残存部最大径26.3cm。器厚が全体的に厚めであるのが特徴的である。口縁部は逆ハの字に大きく開いて立ち、口唇部は外側に面を

第45図 中・近世出土遺物(2)



もつ。頸部でくびれ、胴部はやや大きく張り出すが、下半部を欠いている。全体をロクロ整形していると思われるが、胴部内面は指押さえ痕跡と思われる凹凸があり、それを消すようにヘラナデしている。胴部外面には左上→右下方向のヘラケズリが施されている。胎土は緻密で、土師器等と同様に角閃石・雲母・破砕片岩粒子等が多量に含まれている。焼成良好で、やや硬い。色調は黒褐色(10YR 3/1)。「第3号土器焼成遺構」出土。

次に土鍋2点である。8は、内面に蓋受け状の突出部があるもので、やはり器高の推定が困難である。おそらく、全体の高さの半分程度の部分までの破片であろう。ただし、残存率推定3～5%の小破片であって、胴下半部から底部の形態は不明である。推定口径28cm、残存部高7.3cm。蓋受けから口縁部までは1.9cmである。口縁部の厚みは7mm強、胴部は1cm強でやや厚みのある器である。胴部から口縁部はやや開き気味に立ち上がり、内面の蓋受けが水平に近い状態になる。胴下半は同じ傾きかあるいは直立気味に平底の底部に移行するのであろう。口唇部は上方に向く面をもつ。全体はロクロ整形されている。胎土は細かく、石英・角閃石・雲母・石灰質粒子・土器粉砕粒子等を多量に含む。焼成良好で、硬い。色調は黄灰色(2.5Y 1/5)。「第6号土器焼成遺構」出土。

9は、胴部から口縁部にかけてやや開き気味に立ち

上がる普通の土鍋である。残存率は低く、横幅6.5cm分しかない破片なので、3%以下かもしれない。推定口径36.5cm、残存部高9.2cmである。口唇部には上方を向く面をもち、内面にわずかに肥厚する。胎土は細かく、角閃石・雲母・赤褐色粒子等を多量に含む。焼成良好で、硬い。色調は灰黄色(2.5Y 6/2)。N-4グリッド出土。

また、第1号溝跡からは、赤焼きの摺り鉢片2点、大甕の破片2点、土鍋の破片、白い釉のかかった陶器の小皿の未製品の破片等が出土している。いずれも覆土の比較的上層から出土している。摺り鉢片は素焼きのもので、内面の摺り目はまばらに付けられており、やや古手のものであろう。大甕は外面にアバタ状の緑灰褐色の釉がかかる胴部上位の破片、緑灰褐色の釉がかかった口縁部から頸部の小破片と思われる。土鍋の破片は胴部片ではあるが、どの辺の部位か不明である。

その他、赤褐色の色調の陶器で、常滑の大甕の破片と思われるものが、「第5号土器焼成遺構」・「第8・9号土器焼成遺構」下層・第16号土壇・第44号土壇・第47号土壇・第51号土壇等から出土している。緑灰褐色の釉がかかる陶器の大甕の破片は第1号住居跡・N-5グリッド(2点)から出土しているが、このうち第1号住居跡・N-5グリッドの各1点はアバタ状にかかり、N-5グリッドのもう1点は一部発泡したような状態であるが、きれいに光沢をもって緑灰褐色

にかかっている。

石製品 (第45図・図版25)

石製品には、温石と石臼片がある。温石は縦7.4cm、横9.4cm、厚さ2.55cm、重さ256.53gを測る。横長であり、平面形は台形に近い形態である。上部中央に径1cmの丸い孔が穿孔されているが、紐等を通して携帯する便宜をはかったのであろう。片面が大きく剥離して壊れているが、表面は6面全面がよく研磨されてすべすべであり、少々光沢まである状態である。研磨する以前の製作工程では鉄製刀子状工具を使用したようで、工具痕による凹凸が残っている。滑石製。第45号土壌出土。

石臼は、中央に穿孔される下臼である。孔の部分を含めて約50%が残存しており、残存部分も垂直方向に

ひびが入って2つに割れている。上面の溝は比較的よく残っている。溝の切り方にはきれいな法則性はないが、2～4本おきに方向を変えて、鋸歯状に交差させる通常の切り方をしている。上面の磨耗はあまり進んでおらず、石臼本体の厚みも厚いままである。特に敲打などの痕跡は見当らず、割れ目も自然な感じである。おそらく用材にはすでに石臼製作時点から石切場の岩盤の節理のためにひびが入っていたと思われ、あまり使用が進まないうちに割れてしまったため廃棄されたのであろう。直径30.0cm、厚さ10.3cm、孔の径3.0cm、重さ7.1kgを測る。安山岩製。第41号土壌出土。

柱穴計測表

(単位:cm)

番号	最大径	深さ	備考	番号	最大径	深さ	備考	番号	最大径	深さ	備考
1	38	20	径17柱痕	21	49	46	径26柱痕	41	32	44	径14柱痕
2	44	10		22	60	43	径30柱痕	42	44	41	径18柱痕
3	40	26		23	46	34		43	50	38	
4	33	36		24	32	28		44	35	36	
5	70	43		25	34	31		45	57	34	
6	50	24		26	43	17		46	31	39	
7	40	28		27	35	29		47	35	27	
8	33	36		28	53	23		48	63	28	径25柱痕?
9	32	28		29	38	29		49	50	18	径18柱痕
10	34	21		30	40	45	径27柱痕	50	39	27	
11	43	52	31	36	32	径13柱痕	51	31	22		
12	40	43	32	33	41	径17柱痕	52	31	42	径16柱痕	
13	32	24	33	55	10		53	35	21	径24柱痕	
14	41	22	34	30	39		54	48	45	径28柱痕	
15	33	29	35	26	28		55	50	21		
16	32	36	36	36	14						
17	26	13	37	59	10						
18	38	28	38	54	50	径19柱痕					
19	28	34	39	18	16						
20	24	16	径14柱痕	40	39	36					

V 結 語

今回の調査によって、従来縄文時代と中世の集落跡として把握されていた折原石道遺跡は、平安時代を中心とした集落跡であり、中・近世にも遺構形成がある程度展開していることが明らかになった。

特に、平安時代の遺構には、須恵器生産の系譜をひくと思われる土器焼成遺構・土器焼成関連遺構が含まれており、末野窯跡群の須恵器生産の拡散・衰退期に、それ以前からの窯跡が立地する丘陵上から下位段丘面

1 折原石道遺跡出土土器の編年的位置

まず、第4章で詳述した、各遺構出土の平安時代土器群の特徴をここで再度まとめ、折原石道遺跡における平安時代土器群の変遷を述べてみたい。

今回の調査区の遺構群中最古と考えてよいのは、第2号住居跡・第3号住居跡の土器であろう。前述したが、この2軒の住居跡から出土した土器には接合関係が認められるものもいくつかあり、土器様相もおおむね共通する。

坏・碗類は須恵器を中心とするが、酸化炎焼成のやや赤焼きの土器を少し含むようになる。

坏は口径12～13cm代を主体とし、底径はその2分の1を下回り、器高はおおむね3～4cm代となるものであるが、ややバラツキがある。体部から口縁部にかけての形態は、内彎気味に立ち上がり、口唇部はやや強めに外反する。比較的直線的に立ち上がるものもあるが、そういう個体では口唇部の外反は弱い。

通常は碗と考えるべき高台付坏は、口径15cm、器高5cmを超える大型品と、口径14cm代、底径6cm代、器高5～6cmのやや小型化したものとか存在し、後者の方が多数派になっている。高台付坏は、体部が坏に比べて直線的な立ち上がりを示すものが多い。

一定量の皿が存在するが、高台付坏の蓋になりそうな大型のものも、12cm代の小型のものもある。

また、土器器の型は、長胴甕の場合は「コ」の字状口縁が崩れた形態になっており、胴部の張り出しは小さい。丸胴甕の系譜をひくものはやや短く「ク」の字

に生産拠点が推移するという興味深い現象が確認されている。

本章では、土器焼成遺構・土器焼成関連遺構の歴史的意義を明らかにするため、まず、本遺跡の土器の型式学的変遷と暦年代比定について考証し、その後、土器焼成遺構の各地の調査事例との比較を通じて、平安時代の土器生産の問題について考察することにした。

に折れる口縁部を呈し、やや長胴化している。双方とも胴部上半コヘラケズリ、胴部下半タテ・ナナメヘラケズリという奈良時代以来の調整技法を踏襲する。底部はかなり小さく、「離れ砂」を多用している。

須恵器甕は、肩の張る中型甕と、ナデ肩の大型甕がある。中型甕にはヘラケズリが多用され、大型甕には斜め方向のユビナデが見られるものもある。どちらもやや大きな平底を呈する。

この住居跡の坏・碗類は折原窯跡の製品として紹介されているもの（大里郡市担当者会 1993）と近い様相にある。

これらに後続するのは、第1号住居跡出土土器の一群である。

坏・碗類は赤焼きのものが主体となり、小型化が顕著になり始める。坏は口径が10～12cm代となり、器高も4cmを下回るようになる。底径は口径の2分の1以下であるが、第2・3号住居跡のものに比較すると、さらに縮小する傾向がある。体部・口縁部の内彎・外反の変曲点は前段階に比較してやや下がり加減である。

高台付坏は口径14cm代の大型品が目立たなくなり、11～12cm代を中心とするようになる。高台はやや高く整った形態になり、足高台傾向のものもあるが、形態上のバラツキは大きく、体部・口縁部の内彎・外反のやや極端なものも、直線的な立ち上がりに近いものもある。

土器器の型は、口縁部の「コ」の字の形態がなお形骸

化し、口唇部の外面に沈線を一周させる作りになるもの、口縁部が短く外反し、胴部の張りの小さいもの、「く」の字状口縁でロクロ整形のものなどがあり、ロクロ土器としての堯が成立するのが興味深い。

羽釜が出現しており、一定量存在する。この住居跡のものは赤黒い、タテヘラケズリものを除くとすべて須恵質に焼けているものである。銚部の突出は高めのものと低めのものがある。ロクロ調整が行われているが、胴部中位以下にはタテ・ナナメヘラケズリが施されている。

須恵器類は、やや胴の張る中型堯で、ロクロ調整主体であるが、胴下半にはナナメヘラケズリも施される。

カマド形土器も出土しているが、破片が小さ過ぎて全体のプロポーションがよくわからない。煮炊具をかける部分の径を想定するならば、羽釜の胴径に対応するように見える。

第1号住居跡とはほぼ同様の様相を示すと思われるのは、「第2号土器焼成遺構」を中心とする土器焼成関連遺構の土器群である。

杯・碗類は第1号住居跡の様相に近い。杯は口径10～11cm代、器高3～4cm代で、底径は口径の2分の1以下である。高台付杯は口径10～13cm代、器高5～6cm代、底径は口径の2分の1以下である。体部～口縁部の立ち上がり方は直線的立ち上がりも内彎形態もあるが、細かな形態的バラツキがある。高台は「第2・3号土器焼成遺構」・「第4号土器焼成遺構」には足高台傾向のややしっかりした形態のものがあるが、大方は低い高台で断面も丸いものが多い。

土器器類は、口縁部の「コ」の字の形態が形態化したもので、口唇部の外面に沈線を一周させる作りになるものが主体であるが、より「コ」の字状口縁に近い堯も残存している。

「第2・3号土器焼成遺構」には小皿形態や片口形態の高台付杯もある。

「第2・3号土器焼成遺構」に限って言えば、いくつかの器種には、第1号住居跡よりも新しい要素が認められ、時間軸上の新旧関係になる可能性もあるが、

土器焼成関連遺構全体として考えれば共通する時間帯の中で把握できると考えるべきであろう。

なお、この遺構からは、焼き歪みの大きい土器がかなり出土しており、必要な範囲で図示しているが、この遺構の中で焼成されたものとは考えがたく、焼き台等の用途で、折原窯跡周辺の須恵器の捨て場から拾ってきたものと考えられるため、住居跡と同様な視点でこの一群を考える必要がある。

第3番目の時期として、第1号土器焼成遺構の土器群をあげることができる。

第1号土器焼成遺構の出土品はごくわずかであり、作業後の取り残しを思わせる。形態の復元が可能な高台付杯2点はこの遺構で焼かれたものと考えたい。この2点は口径12cm代、器高4cm代、底径5～6cm代である。高台の貼り付け方は底部の周縁に横から貼り付ける方法によっており、本来的に作られた底部よりもやや大きめに見える。2点ともオレンジ色に近い赤い焼き物に仕上がっている。ロクロ調整はこれ以前に説明した各遺構の一群よりも弱く、焼成があまりために器表面の風化が著しく、調整痕跡は内面では若干見えるものの外面ではあまり明瞭でない。また、高台の付かない杯も含めて、5点の底部付近の破片があるが、高台が付くものも付かないものはほぼ同様な比率で作られており、互換性があるようである。第25図9は口縁部が壊れている灰釉陶器であり、被熱している。他の土器片とともに焼き台に転用されていたものと考えることができよう。

なお、古代に属する土壌として第7・25号土壌の2点の土器器類、第12号土壌の羽釜も取り上げておく。

第7・25号土壌の堯は口縁部下端に沈線を引くようにして段を付けたような作りをしている。口縁部～頸部は「く」の字状に作る。調整手法は、前段階以前の手法と同じく、胴部上位コヘラケズリ、中位以下タテ・ナナメヘラケズリである。土器の胎土・焼成も前段階のものと同や異なり、新しい段階の土器として考えるべきものであろう。

第12号土壌の羽釜もロクロ調整が目立たず、内面に

ユビオサエ痕跡が残るなど土師器的に調整されていることを新しい特徴として考えることができる。

これらの土壌の土器類は、便宜上第1号土器焼成遺構と同じ時期として考えておくと、本来関係がなく、年代の幅をとって考えることにする。

以上、折原石道遺跡出土の平安時代土器群について相対年代順にまとめてみた。これをそれぞれ「期」として段階設定するならば、以下のとおりになる。

I期	第2・3号住居跡 ↓
II期(古)	第1号住居跡 ↓
II期(新)	「第2号土器焼成遺構」周辺 ↓
III期	第1号土器焼成遺構 第7・25・12号土壌

このように大きく3時期で、II期のみ新旧に分けた。III期は坏・碗類と煮炊具のそれぞれの新旧で別々に考えたものを便宜上一つの段階にしたのもので、やや幅のある年代を考慮したい。

また、暦年代比定の材料は大変少ないと言ってよく、わずかに第3号住居跡の「施釉陶器模倣」の耳皿、第1号住居跡の須恵質羽釜、第1号土器焼成遺構の焼き台に転用された灰釉陶器皿等により他遺跡との比較が可能になると思われる。

ちなみに、第1号土器焼成遺構の灰釉陶器皿を東遠江産でO-53窯式併行期(田中広明氏ご教示)とするならば、それ自体には10世紀前半の年代を与え、第1号土器焼成遺構には10世紀中葉あたりの年代が与えられる可能性がある。

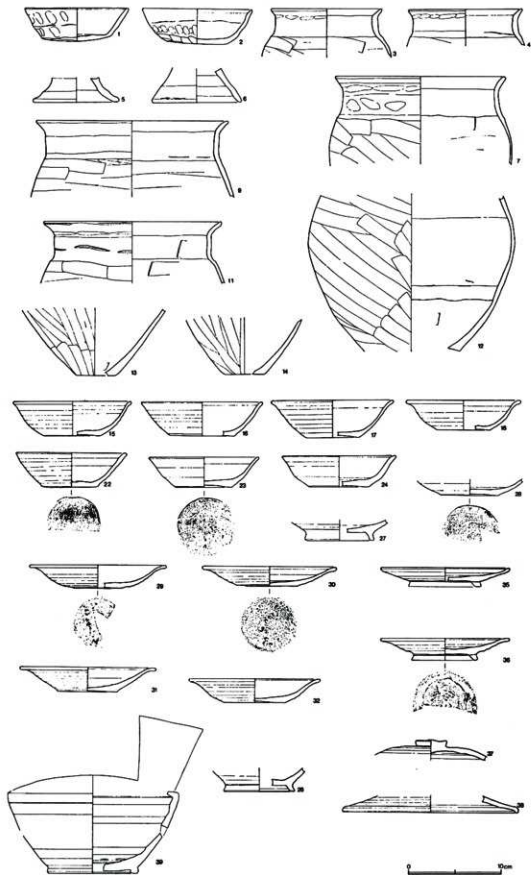
一方、須恵器編年についても考慮しなければならぬ。これについては行論の都合上9世紀後半以降について考えることにしたい。従来、末野窯跡群の須恵器編年は研究の蓄積が少なく、現在においても、1987年の酒井清治氏の編年案(酒井 1987)を超えるものは

なく、酒井氏案を中心に考えざるをえない。酒井氏の編年案は、埼玉県立歴史資料館が昭和62年度から昭和60年度までの9年間をかけて実施した「埼玉の古代窯業調査」の調査報告書の考察編の一部として発表されたものであり、南比企窯跡群・末野窯跡群・東金子窯跡群のいずれの須恵器についても年代的位置付けを試みている。末野窯跡群に関しては、当時の資料的限界から集落跡つまり消費地資料を中心に検討している。

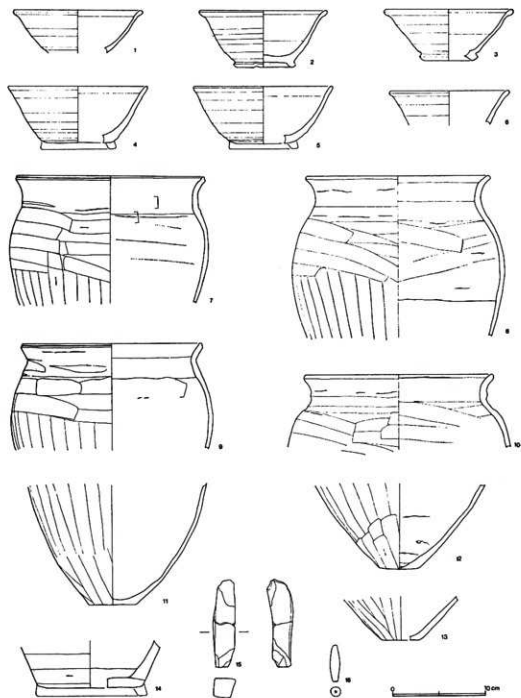
酒井氏が末野窯跡群の9世紀後半以降を検討するための主要な材料に取り上げたのは花園町台耕地遺跡の調査報告書で示された奈良・平安時代土器編年のうち「台耕地第三期」に相当する第77号住居跡、寄居町沼下遺跡第7号住居跡などである。酒井氏は「台耕地第三期を第二期と比べると坏は底径がさらに小さくなる傾向にあり、口唇部は大きく外反する例が主体になる。高台付碗は小形になり第二期の口径は14~15cmが主体であったものが14cm近くなり、高台幅も狭くまた低くなる。高台付碗の蓋はこの期には極端に少なくなりこの時期以降消滅する。皿は大形、小形品が前期から続くが、いずれも大きく外反して小形になる。高台付皿は高台が低く、高台径が狭くなる。」とした上で、この一群に「9世紀第3四半期でも新しい時期が中心」という年代を与えている。これは、台耕地第77号住居跡からK-90窯式に相当する灰釉陶器が出土していること、新久窯跡併行の台耕地第二期相当の須恵器を含む児玉町阿知越遺跡第6号住居跡に土師器の様相が近似する上里町若宮宮台遺跡第44号住居跡から「天安二年」(856年)銘の刻字紡錘車が出土していることを根拠にしている。

さらに、「これに続く9世紀第4四半期あるいは10世紀に入る可能性のあるもの」として台耕地第78号住居跡・岡部町西浦北遺跡第4号住居跡を指摘し、「坏類はさらに底径が小さくなり、口唇部は大きく反り返る。高台付碗はさらに小形で浅くなり坏と比べやや深いものの、形態は類似して高台付坏とよべるものである。高台は低く外へ張り出し、不定形を呈する」とし、「高台付坏」の変遷について前段階の台耕地第77号住

第46図 大里郡域の平安時代土器 (1) (寄居町沼下遺跡第7号住居跡)



第47図 大里郡域の平安時代土器（2）（寄居町沼下遺跡第8号住居跡）

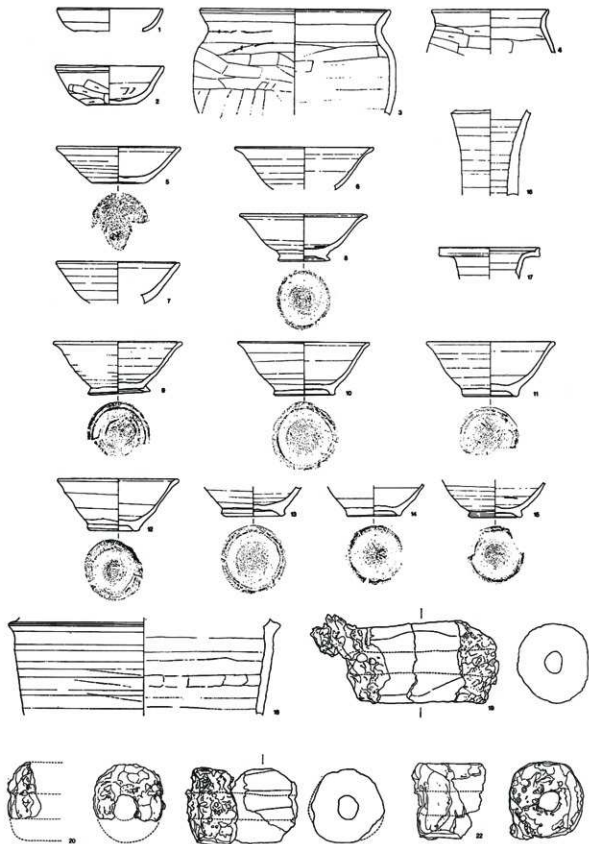


居跡から沼下第8号住居跡→寄居町中山遺跡第1号住居跡→上里町中堀遺跡（埼玉県教育委員会調査区）第3号住居跡→沼下第19号住居跡を経て、小形品となるという。口径は13～14cmで変わらないものの、底径が縮小し、器高も6cm以下になる。そして、台耕地第78号住居跡に後続するものには見玉町十二天遺跡5b・7a住居跡例のような口径13cm以下の一群を位置付け

る。この段階は、大原2号窯式の灰釉陶器の共伴や足高高台の出現をもとに10世紀前半代とする。

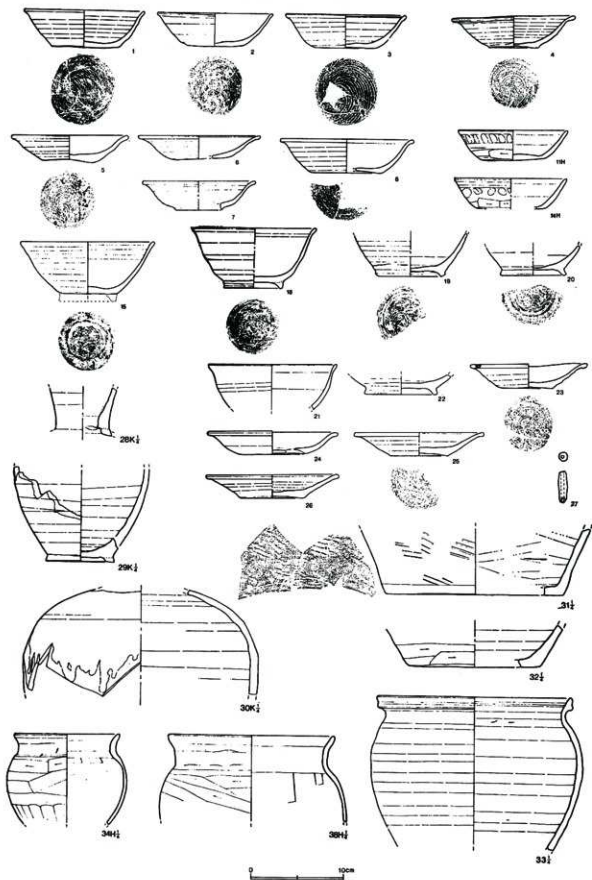
屋間孝志氏も寄居町桜沢窯跡の調査報告書（屋間他1994）でこのあたりの年代に当てられる土器群の検討を行っている。屋間氏はまず、桜沢窯跡の坏・高台付坏の特徴を、坏は「直線的に開くタイプと体部が膨らみ、口縁部の外反するタイプの二種類がある。端部は

第48図 大里郡域の平安時代土器 (3) (寄居町中山遺跡第1号住居跡)

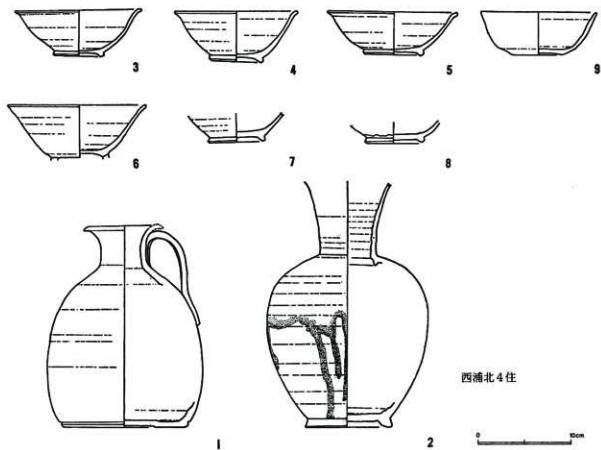
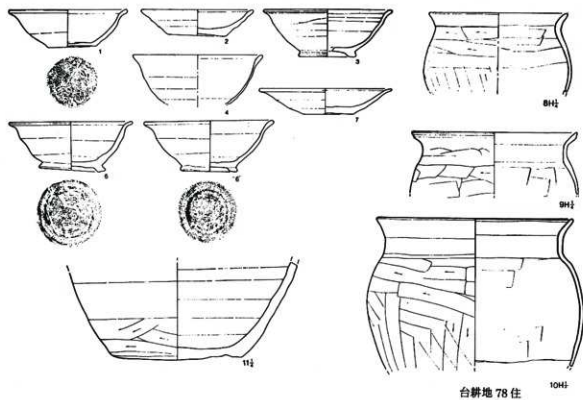


0 10cm

第49図 大里郡域の平安時代土器（4）（花園町台耕地遺跡第77号住居跡）



第50図 大里郡域の平安時代土器（5）（台耕地遺跡第78号住居跡・岡部町西浦北遺跡第4号住居跡）



ともに玉縁状に肥厚し、前者は底部が厚く、後者は均一的な傾向がある」とし、法量的に坏と高台付坏との互換性があることを指摘し、この類例として台耕地第78号住居跡・西浦北第4号住居跡・折原窯跡をあげた。そして、坏の変化を通じた前後関係を、毛呂山町伴六遺跡第12号住居跡→桜沢窯跡・台耕地第78号住居跡→三芳町新開窯跡とした上で、入間市新久D-1、D-3窯跡に見られる深身の碗がある折原窯跡をこれらに対してやや新しい要素を含むものと認識している。

結果的に、桜沢窯跡は10世紀第1四半期に位置付け、折原窯跡はほぼ同時期、新開窯跡を10世紀前半とする。K-90窯式相当の灰釉陶器が時期の異なるとされる台耕地第77号住居跡と西浦北遺跡第4号住居跡の双方から出土することについてはK-90窯式の年代幅として理解しようとしている。

これらを参考にすれば、折原石道Ⅰ期は折原窯跡の一群を含む年代にあてはめることが可能であるため、桜沢窯跡と同時期と考えることができる。坏・高台付坏の法量を基準に考えるならば、台耕地Ⅱ期と台耕地Ⅲ期の過渡的段階と考えることができる。また沼下第8号住居跡・中山第1号住居跡の一群もこの段階に含めて考えることができそうである。K-90窯式相当の灰釉陶器の時期を9世紀後半から末葉と考えるならば、折原石道Ⅰ期も9世紀後半から末葉を中心とした時期として考えなければならぬ。しかし、昼間氏の分析も尊重し、この時期の下限は10世紀初頭においておきたい。

折原石道Ⅱ期は台耕地第78号住居跡段階と見てよいであろう。酒井氏はこの時期を9世紀第4四半期から10世紀初頭と見るわけであるが、桜沢窯跡・折原窯跡よりもやや新しい段階と考えてよいならば、むしろ10世紀初頭の方に主体を置いて考えた方がよいであろう。ただし、前段階との時間軸上の重複期間がまったくないと考えるのは困難なので、上限を9世紀第4四半期あたりとし、下限を10世紀前半でも古い時期においておきたい。折原石道Ⅲ期は遺物量も少なく、他の遺跡の資料と十分な比較が成立しないので、暦年代比

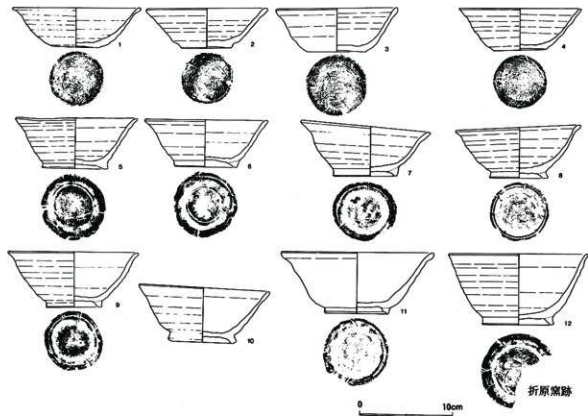
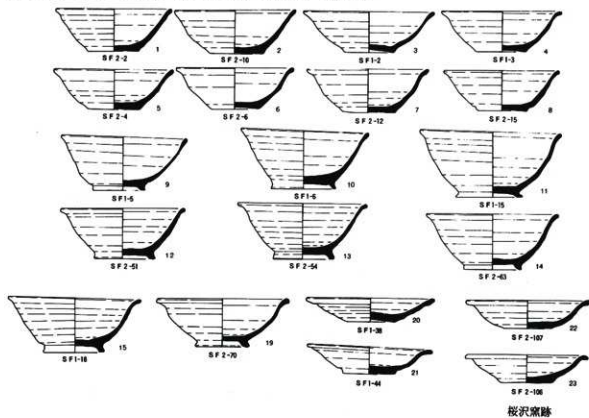
定は保留しておきたいところであるが、坏の口径が13cm以下に縮小する段階を10世紀前半とする酒井説に従い、この時期を10世紀前半以降としておきたい。第1号土器焼成遺構については10世紀前半としてもよいと思うが、同じ時期に括った土壌の資料は10世紀後半まで下る可能性もある。

大里郡域を中心とした須恵器編年を参考にして、編年の考察を試みきたが、ここでもう少し考えてみたい。それは既存の児玉郡域の土器編年との比較である。

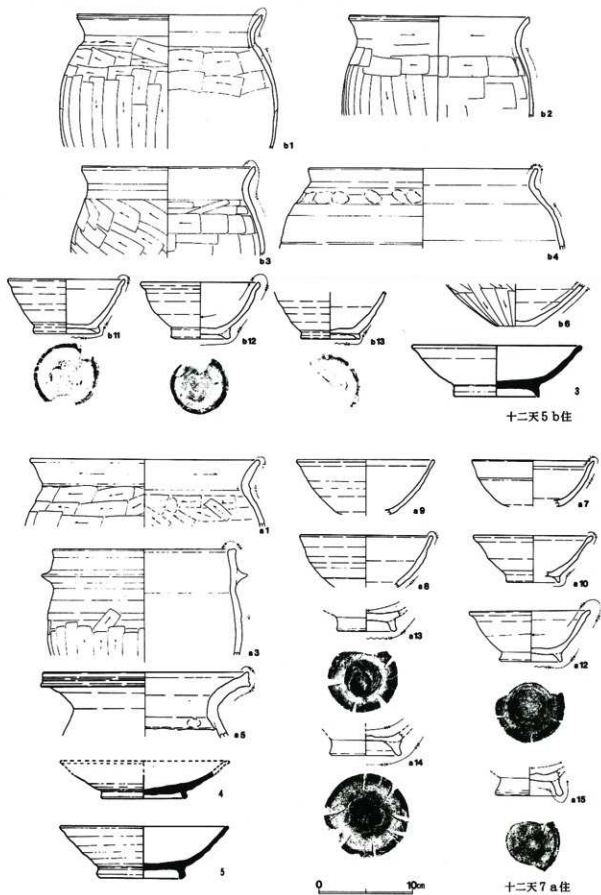
児玉郡域の平安時代土器編年としては、小川貴司・橋本博文氏による早稲田大学本庄校地内の大久保山遺跡の奈良・平安時代土器編年(小川・橋本 1980)、鈴木徳雄氏の土器「北武蔵型坏」・「武蔵型甕」の変遷を示した論文(鈴木 1984)、田中広明・末木啓介氏等の中堀遺跡(埋文事業団調査区)の編年(田中・末木他 1997)等がある。これらについても、9世紀後半以降の部分について検討しておきたい。

小川・橋本編年の場合は、大久保山遺跡で確認された土器・須恵器が鬼高式終末～国分式以降の長期間にわたっており、報告当時まだ児玉郡域の土器編年が確立したというには程遠い段階であったので、坏を中心とした器種分類から始まり、坏を編年軸においた資料操作の結果としての編年案になっている。坏はⅠ類(須恵器)、Ⅱ類(非ロクロ土器)、Ⅲ類(ロクロ土器)に大分類し、器種構成の内容と坏類の変遷を中心とした配列により、Ⅰ期～Ⅴ期まで編年している。このうち、9世紀後半以降にあたると思われるのは、坏Ⅰa類(高台をもたない須恵器坏)が「糸切り後の底部のヘラケズリが完全になくなる」段階をⅢ期第3小期とし、Ⅳ期には須恵器Ⅰ類がなくなり、ロクロ土器坏Ⅲ類や羽釜が加わる。Ⅴ期には黒色土器が伴い、羽釜が消失する、という大別になる。Ⅲ期第4小期に「コ」の字状口縁が成立し、第5小期にⅢが加わる。Ⅳ期第2小期に足高台のロクロ土器坏が成立する。灰釉陶器との共存はⅣ期第2小期にK-89窯式の碗とⅢ、第3小期にO-53窯式の碗と水瓶があるという。

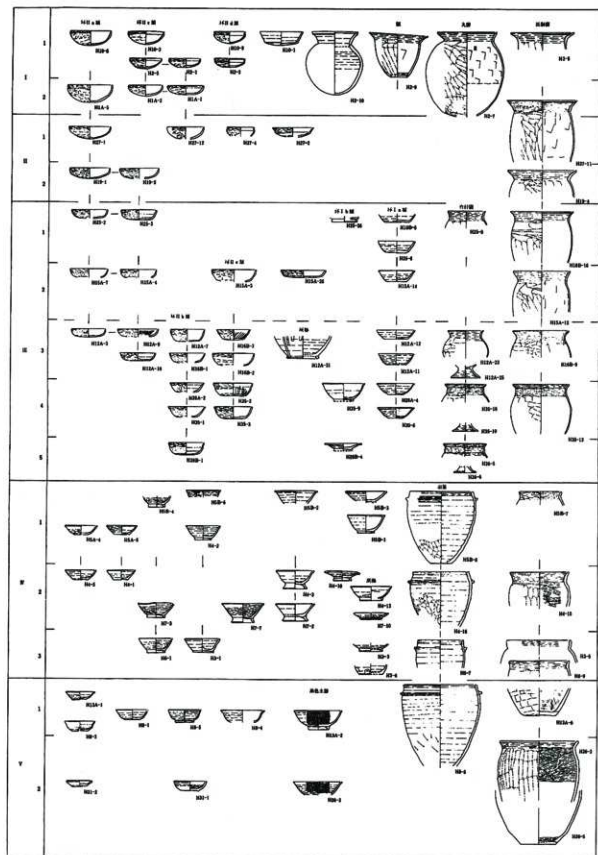
第51図 大里郡域の平安時代土器 (6) (寄居町桜沢窯跡・折原窯跡)

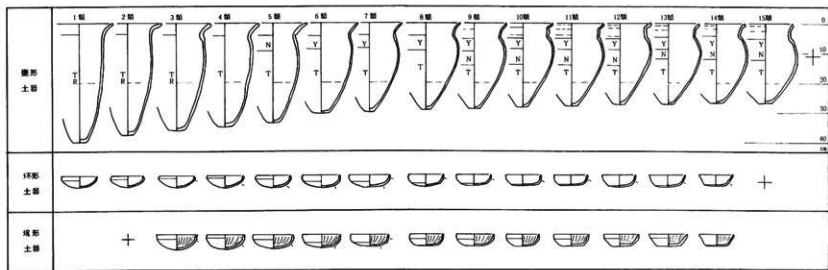


第52図 平安時代土器參考資料（見玉町十二天遺跡第5b・7a住居跡）



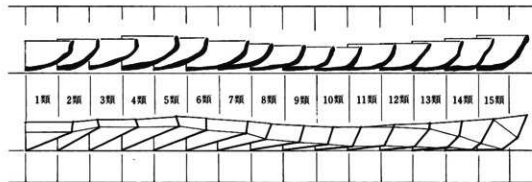
第53図 大久保山遺跡の奈良・平安時代土器編年



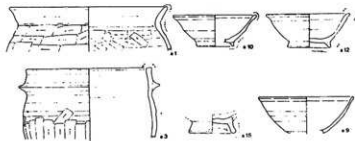


北武蔵における土師器の系統配列図

【TR--縦位亂削り, T--縦位削り, Y--横位削り, N--斜位削り】



北武蔵系環の類毎の累積的配列（動態的変遷模式）



変形土器16類と伴出土器一十二天連鉢7a住

小川氏があてた実年代の推定は旧編年による全面的に依拠しているため、ここでは現在の研究段階に対応するように補正するほかない。新久A-1、A-2、E-1号窯の須恵器に類似するものを伴うⅢ期第2～3小期を9世紀後半とし、O-53窯式の灰釉陶器の共伴からⅣ期第3小期を10世紀前半代と考えれば、折原石道Ⅰ期に相当するのはⅣ期第1小期、折原石道Ⅱ期がⅣ期第2小期、折原石道Ⅲ期がⅣ期第3小期ということになる。

大久保山遺跡は児玉郡域でもやや北寄りであるため、折原石道遺跡とは若干土器様相を異にする。特に、羽釜の成立は折原石道Ⅰ期併行期となり、折原石道遺跡よりも幾分早いということになる。

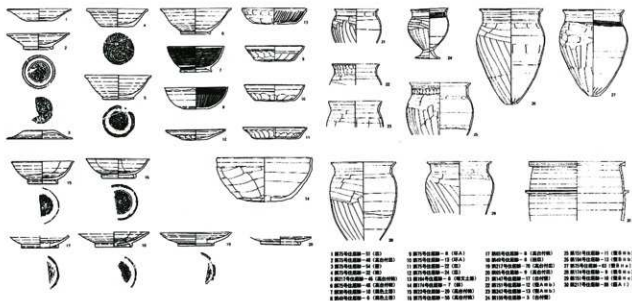
これに対して、鈴木徳雄氏の扱った資料ではどうであろうか。児玉郡域の土器変遷について鈴木氏が取り上げたのは、鬼高式終末期・真間式成立期～因分式終末期の、いわゆる「北武藏型坏」・「武藏型甕」の変遷を追跡することができる範囲である。9世紀後半以降では甕11類期以降ということになる。なお、鈴木氏の土器変遷の認識は1983年に甕を中心としたもの（鈴木 1983）、1984年に前年の考察に基づく坏を取り扱ったもの（鈴木 1984）の2回にわたる検討がある。したがって、論述の特徴として甕が中心となっている。鈴木氏は、甕の成形技法の変化と器形の変遷に着目し、鬼高式以来の伝統的輪積み手法で体部が成形されているもの（体部成形A手法）から、成形時に粘土を圧延して薄い粘土帯を作るもの（体部成形B手法）への変化が、鬼高式特有の土器作りから真間式への大きな画期としてとらえ、さらに口縁部については「8類から頸部上が直立する『コ』の字状口縁（9～10、11類）への変遷は、8類に認められた曲げによる成形手法に依存する傾向が、幅広積み上げの体部成形B手法に内在するものであることから顕著となり、口縁外反部は、この曲げによる成形手法に完全に依存する様になる。これらが10類である。この傾向はさらに進行し、頸部が内湾する属性から頸部の曲げが弱いものが多出する時期を出現させる」（鈴木 1983、16ページ）とし、

さらに甕15類と16類の評価に関しては「『コ』の字状口縁の終末は、頸部、口辺屈曲部の境界が不明瞭となり、口縁部の屈曲が弱まるにつれ頸部の屈曲が強まる傾向が認められることから一見すると『ク』の字状の口縁を有する丸甕的形態へと変化する。この段階が16類」であり、「15類以降は器壁が厚くかつ一帯の幅を減じるものが顕発する。この段階を境に所謂『武藏型甕』の成形手法の伝統と、型式学的連続が解体する」（同上）という。さらに鈴木氏は「土器生産のあり方は、甕10類期より変化し、甕14類を主体とする時期を境に『武藏型甕』や『北武藏型坏』の型式学的組列が急激に崩壊する。（中略）すなわち古代の土器生産の終焉である。」（同上、19ページ）という。また、羽釜の出現については、甕14類期に伴う土器坏14類期の須恵器生産の縮小に触れ、「須恵器そのものが土師質に変質する頃には土師器が激減する傾向を辿る。この時期以降になると、土師器生産の零落はほぼかりでなく甕にまでおよび、従来の土器煮沸形態の大半を占めていた『武藏型土師器甕』も激減し、須恵系の器種と考えられる羽釜に漸次とって替わることも注目される点といえよう」（鈴木 1984、71ページ）としている。鈴木氏の示している資料では甕16類期に羽釜があるが、児玉町阿知越遺跡には甕11類期の住居跡に羽釜の共伴が確認されている（鈴木・市川他 1984）。なお、酒井清治氏は新久A-1、A-3号窯跡に併行する台耕地第Ⅱ期相当の須恵器を伴うものとして、阿知越遺跡第6号住居跡（鈴木氏甕11類期）をあげ、9世紀後半に位置付け、台耕地第Ⅳ期の台耕地第78号住居跡に続く児玉町十二天遺跡5b・7a住居跡（鈴木氏甕16類期）には10世紀前半の位置を与える。折原石道遺跡との比較で考えるならば、甕14類期に折原石道Ⅰ期、甕15類期に折原石道Ⅱ期、甕16類期に折原石道Ⅲ期をあてはめて考えることができようである。

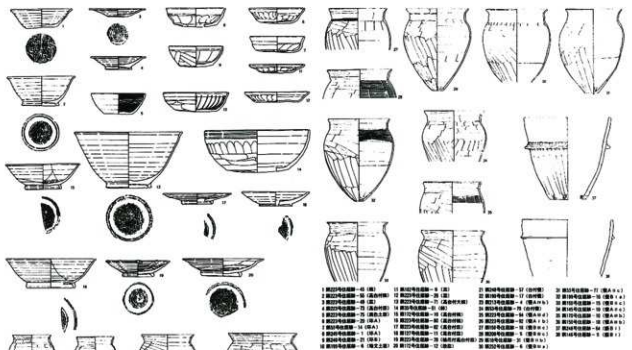
一方、田中広明・末木啓介氏等の中瀬遺跡の土器編年は、集落出現期の8世紀後半から消滅期の10世紀第4四半期まで、四半世紀刻みの9期編年となっている。したがって、Ⅴ期（9世紀第4四半期）以降が折原石

第55図 中壙遺跡の平安時代土器編年(1)(N・V期)

中壙IV期

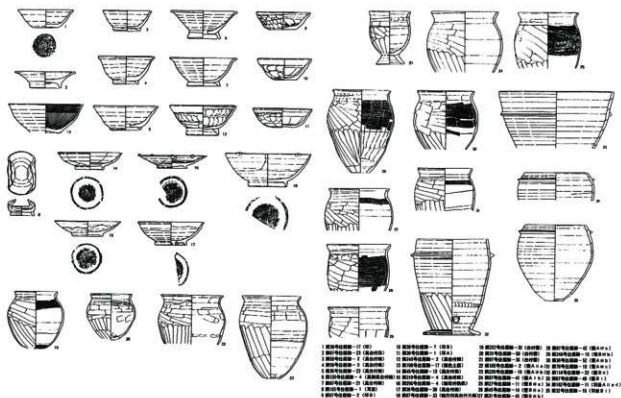


中壙V期

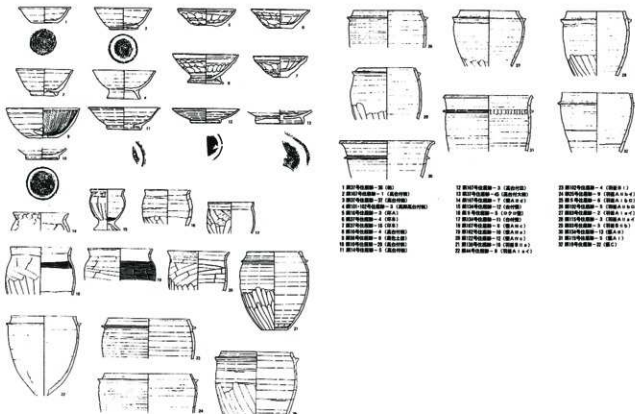


第56図 中坵遺跡の平安時代土器編年(2)(Ⅵ・Ⅶ期)

中坵Ⅵ期

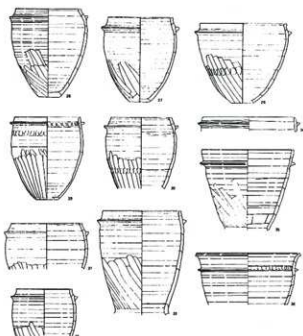
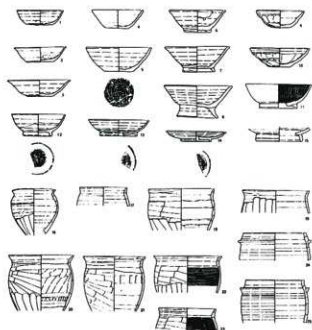


中坵Ⅶ期



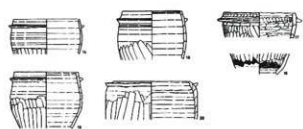
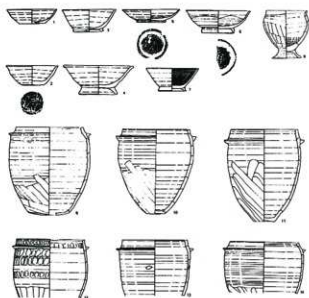
第57図 中壙遺跡の平安時代土器編年(3)(Ⅶ・Ⅷ期)

中壙Ⅶ期



- | | | |
|--------------------------|--------------------------|-------------------------|
| 1 中壙Ⅶ期土器編年-1 (小鉢形) | 13 中壙Ⅶ期土器編年-13 (高直筒形) | 25 壙Ⅶ期土器編年-25 (直筒 A Ⅶ期) |
| 2 中壙Ⅶ期土器編年-2 (碗) | 14 中壙Ⅶ期土器編年-14 (高直筒形) | 26 壙Ⅶ期土器編年-26 (直筒 A Ⅶ期) |
| 3 中壙Ⅶ期土器編年-3 (碗) | 15 中壙Ⅶ期土器編年-15 (高直筒形) | 27 壙Ⅶ期土器編年-27 (直筒 A Ⅶ期) |
| 4 中壙Ⅶ期土器編年-4 (小鉢形) | 16 中壙Ⅶ期土器編年-16 (小鉢形) | 28 壙Ⅶ期土器編年-28 (直筒 A Ⅶ期) |
| 5 中壙Ⅶ期土器編年-5 (碗) | 17 中壙Ⅶ期土器編年-17 (小鉢形) | 29 壙Ⅶ期土器編年-29 (直筒 A Ⅶ期) |
| 6 中壙Ⅶ期土器編年-6 (高直筒形) | 18 中壙Ⅶ期土器編年-18 (直筒 A Ⅶ期) | 30 壙Ⅶ期土器編年-30 (直筒 A Ⅶ期) |
| 7 中壙Ⅶ期土器編年-7 (高直筒形) | 19 中壙Ⅶ期土器編年-19 (直筒 A Ⅶ期) | 31 壙Ⅶ期土器編年-31 (直筒 A Ⅶ期) |
| 8 中壙Ⅶ期土器編年-8 (高直筒形) | 20 中壙Ⅶ期土器編年-20 (直筒 A Ⅶ期) | 32 壙Ⅶ期土器編年-32 (直筒 A Ⅶ期) |
| 9 中壙Ⅶ期土器編年-9 (直筒 A Ⅶ期) | 21 中壙Ⅶ期土器編年-21 (直筒 A Ⅶ期) | 33 壙Ⅶ期土器編年-33 (直筒 A Ⅶ期) |
| 10 中壙Ⅶ期土器編年-10 (直筒 A Ⅶ期) | 22 中壙Ⅶ期土器編年-22 (直筒 A Ⅶ期) | 34 壙Ⅶ期土器編年-34 (直筒 A Ⅶ期) |
| 11 中壙Ⅶ期土器編年-11 (直筒 A Ⅶ期) | 23 中壙Ⅶ期土器編年-23 (直筒 A Ⅶ期) | 35 壙Ⅶ期土器編年-35 (直筒 A Ⅶ期) |
| 12 中壙Ⅶ期土器編年-12 (直筒 A Ⅶ期) | 24 中壙Ⅶ期土器編年-24 (直筒 A Ⅶ期) | 36 壙Ⅶ期土器編年-36 (直筒 A Ⅶ期) |

中壙Ⅷ期



- | | | |
|---------------------|-------------------------|-------------------------|
| 1 中壙Ⅷ期土器編年-1 (小鉢形) | 8 中壙Ⅷ期土器編年-8 (直筒形) | 15 壙Ⅷ期土器編年-15 (直筒 A Ⅷ期) |
| 2 中壙Ⅷ期土器編年-2 (碗) | 9 壙Ⅷ期土器編年-9 (直筒 A Ⅷ期) | 16 壙Ⅷ期土器編年-16 (直筒 A Ⅷ期) |
| 3 中壙Ⅷ期土器編年-3 (碗) | 10 壙Ⅷ期土器編年-10 (直筒 A Ⅷ期) | 17 壙Ⅷ期土器編年-17 (直筒 A Ⅷ期) |
| 4 中壙Ⅷ期土器編年-4 (高直筒形) | 11 壙Ⅷ期土器編年-11 (直筒 A Ⅷ期) | 18 壙Ⅷ期土器編年-18 (直筒 A Ⅷ期) |
| 5 中壙Ⅷ期土器編年-5 (高直筒形) | 12 壙Ⅷ期土器編年-12 (直筒 A Ⅷ期) | 19 壙Ⅷ期土器編年-19 (直筒 A Ⅷ期) |
| 6 中壙Ⅷ期土器編年-6 (高直筒形) | 13 壙Ⅷ期土器編年-13 (直筒 A Ⅷ期) | 20 壙Ⅷ期土器編年-20 (直筒 A Ⅷ期) |
| 7 中壙Ⅷ期土器編年-7 (高直筒形) | 14 壙Ⅷ期土器編年-14 (直筒 A Ⅷ期) | |

道遺跡に関連するであろう。中堀遺跡は、258軒にも及ぶ平安時代の堅穴住居跡を調査し、膨大な遺物量を誇る。今後児玉郡域の平安時代集落跡の研究上欠くことのできない遺跡である。V期以降の土器の特徴を見ておきたいが、説明用語は本書との比較のため利根川の言葉に置き換えておく。まずV期は、須恵器蓋消滅・「コ」の字状口縁甕の頸部短小化・須恵器碗底径縮小、VI期は須恵器碗底径縮小（口径の2分の1以下）・足高台の出現・羽釜の出現・「コ」の字状口縁甕の口縁部形態崩壊、VII期は須恵器碗の小型化・土師器甕の減少・甕口縁部形態の矮小化、VIII期は須恵器杯小型化・厚甕残存・羽釜増産、IX期は土師器杯消滅・須恵器杯小型化進行・土師器甕消滅などであり、灰釉陶器はV期：K-90窯式3型式、VI期：O-53窯式1型式、VII期：O-53窯式2型式・大原2号窯式後半期、VIII期：虎浜山1号窯式、IX期：虎浜山1号窯式～丸石

2 土器焼成遺構について

第IV章において述べたように、折原石道遺跡の土器焼成遺構は1基が確実なものであるが、存在可能性としては、土器焼成関連遺構中に埋没していた焼土の広がり8～10m所程度と、平安時代に属する土壌中に焼土粒や焼土ブロックが詰まっていたもの13基分は、本来土器焼成遺構であった可能性があると考えることができる。とすれば、この遺跡には実に20数基程度の多数の土器焼成遺構が「平地の窯」として操業していたことになる。

本節では、折原石道遺跡で検出した遺構と類似するものを県内や近県の遺跡の例から拾い、土器焼成遺構の様相について検討しておきたい。

幸いにして、この種の遺構については、入間市森坂遺跡の調査報告を通じた書上元博氏による検討（書上1996）や富田和夫氏による関東西部を対象とするまとまった研究（富田1997）があるので、これらの成果を参考にしながらこの項をまとめることにしたい。

まず、折原石道遺跡の遺構の様相からわかることをもう一度述べておきたい。

折原石道遺跡の土器焼成遺構は、集落跡の中心より

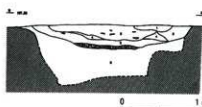
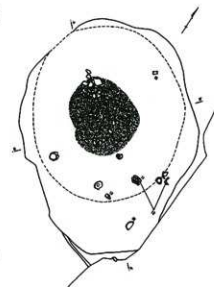
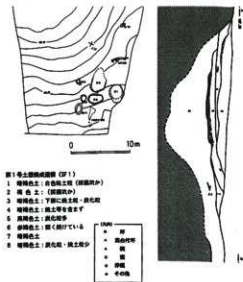
2号窯式併行期であるという。暦年代比定はV期：9世紀第4四半期、VI期：10世紀第1四半期、VII期：10世紀第2四半期、VIII期：10世紀第3四半期、IX期：10世紀第4四半期であるが、これは、最近の斎藤孝正氏の見解（斎藤1994）にも符合するものである。折原石道I期にはまだ羽釜がなく、中堀V期相当に位置付けられる可能性があるが、「コ」の字状口縁甕の口縁部形態はすでに崩壊しつつあり、V期～VI期に位置付けておいた方がよいかもれない。折原石道II期は羽釜出現期であるので中堀VI期相当である。折原石道III期は土師器焼成関連遺構の後半期でO-53窯式併行と思われる灰釉陶器も伴うことから中堀VI～VII期相当と考えてよいであろう。

以上、児玉郡域の土器編年とも比較してみたが、先に推定した暦年代で考えることが大過ないことが傍証されたと考えておきたい。

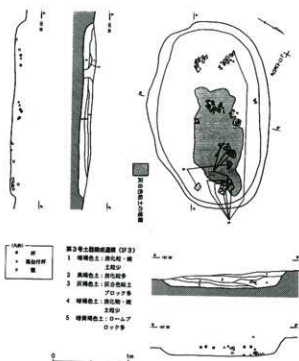
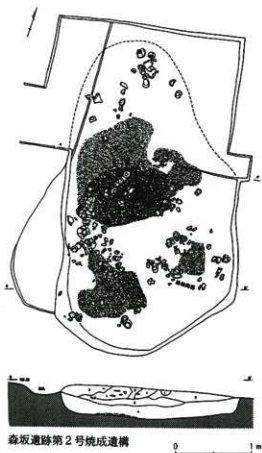
はやや南側の丘陵奇りの区域に構築されていた。確実な土器焼成遺構は、第1号土器焼成遺構1基のみであるが、土器焼成関連遺構とした大土壌の中に、最低でも8か所くらいは、土器焼成遺構の痕跡ではないかと思われる被熱面や焼土ブロック・焼土粒の多量に含まれる土層が確認できる。第1号土器焼成遺構を中心として考えると、この遺構の平面形態は楕円形ないし倒卵形を基調としており、規模も長径1～2m程度、深さ10～30cm程度、皿状のゆるやかな掘り込みである。この遺構で焼成されたと思われるのは、第1号土器焼成遺構底面に残されたものを見る限り、赤焼きの高台付杯形土器でクロロ使用で整形・調整されているが、やや調整があまく、土器の厚みもやや厚めのものであった。この現象からは焼成遺構としての土壌の天井部をオープンに近い状況にして土器焼成していたことも想定できよう。

このタイプの土器焼成遺構は、窯跡研究会の網羅的な研究によって検討の進んでいる「土師器焼成坑」の「B類焼成坑」に相当するものである（望月1997）。望月精司氏によれば、「B類焼成坑」の主要な特徴と

第58図 土器焼成遺構の事例(1) (入間市森坂遺跡)



森坂遺跡第1号焼成遺構



森坂遺跡第3号焼成遺構

して①床面のみが被熱し、壁面には被熱痕跡を持たない、②平面形は円形を基調とし、直線的な面を形成しない、全体的に壁の立ち上がりは緩く、壁面が傾斜してすり鉢状を呈する、③主に関東を中心として、それより東北区域で確認される、ということが示されている。

また、富田和夫氏は旧武蔵国を中心とした関東西部の古代の「土器焼成坑」には「水深逆長台形タイプ」という非ロクロ土器を生産した焼成坑と、ロクロ土器（須恵系土器）を焼成した「B類焼成坑」の二つのタイプが分布しており、盛行時期・焼成器種等の相違点が大いとした上で、「水深逆長台形タイプ」は他地域の焼成坑との系譜的関連を辿るのがむずかしく、「B類焼成坑」は須恵器窯跡群に近接しており、出土土器の器形や組成から、「須恵器窯跡群の解体とロクロ土器焼成坑の成立が無関係でないこと、寧ろ軌を一にした一連の動きの中で成立したことを示すものといえよう」と指摘し、この論文執筆当時すでに調査が行われていた折原石道遺跡の土器焼成遺構について、末野窯跡群の動きも、それまでに確認されていた入間市森坂遺跡・三芳町新開遺跡・多摩市南多摩遺跡群山野短大遺跡等と同様と考へ、「同窯跡群（末野窯跡群一利根川註）でもほぼ同一歩調をとることが判明しつつある」と言及されている（富田 1997 165ページ）。

この富田氏の指摘はすでに本遺跡例に関する問題点にすでに解答を与えてしまっているに等しい。しかしながら、これでこの種の遺構から考えられることのすべてと考えてしまってもよいかは、この項で改めて検討しておくことにする。

そこで、改めて本遺跡の土器焼成遺構と同じ類型に属する「B類焼成坑」の検出例に当たってみたい。

まず、入間市森坂遺跡例（書上 1996）を取り上げる。森坂遺跡は東金子窯跡群の分布する丘陵と一続きになった丘陵斜面に位置する。この遺跡の土器焼成坑は、遺跡南西端部の谷の北側斜面部中に検出され、粘土採掘坑と重複しながら分布している。首都圏中央

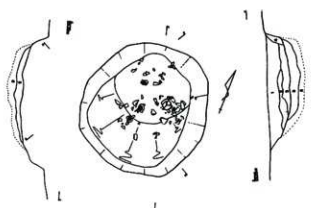
連絡自動車道の広い調査区内で検出されたにもかかわらず、斜面の200㎡程度の狭い範囲に3基の土器焼成坑と70基以上の粘土採掘坑が集中していた。第1号土器焼成遺構は長径3.05m、深さ30cmで、粘土採掘坑が最大約60cm埋没した後掘られている。第2号土器焼成遺構は長径約4m、深さ28～40cm、第3号土器焼成遺構は長径2.44m、深さ10～20cmで、粘土採掘坑覆土を掘り込んでいる。いずれも平面楕円形を呈する。この遺跡の土器焼成遺構はやや大型で、遺構底面や覆土中に残された土器は多かった。特に、第2号土器焼成遺構には被熱して釉が変色した緑釉陶器皿を含め、実測個体だけで75点もの土器が出土している。遺構内の被熱部分は第1号は底面中央の長径1m程度、第2号は底面中央の長径1.5m・底面南西部の長径90cm・底面南東部の長径40cmの3か所、第3号には確認されなかった。遺物はロクロ土器の高台付杯・杯を中心として、少量の非ロクロ土器甕・鉢を含んでいた。

第2号土器焼成遺構は、被熱部分が3か所に分かれ、遺構の壁がはつきりしなかったことが述べられているので、あるいは3基の土器焼成遺構の重複として考えるべきではなからうか。そうすれば、長径2m前後となって、第3号に近い規模となる。また、第3号には被熱部分がなく、天井部と想定された灰白色粘土ブロックを多量に含む灰褐色土層が確認されているが、土器の出土状態を「流れ込み」、灰褐色土層を土器製作以前の粘土溜りと考えてしまえば、一種の工務的遺構と解釈できる余地もある。

いずれにせよ大きさを別とすれば、この遺跡の土器焼成遺構は折原石道遺跡例に比較的近似した様相を持っている。

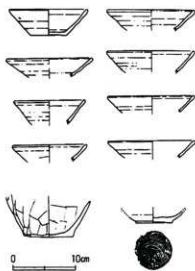
次に、三芳町新開遺跡例（松本 1983、柳井 1989・1993）である。新開遺跡は武蔵野台地上の平坦面にあり、緩斜面を利用して須恵器窯跡も構築されている。土器焼成遺構とされる土塊は、やや南東に離れた本村北遺跡も同じ遺跡の東南端部と認識するとならば、現在のところやや離れた3地点から合計7基確認されている。このうちTc区1号窯とされた遺構は緩斜面に、

第59図 土器焼成遺構の事例(2) (三芳町新開遺跡・本村北遺跡)

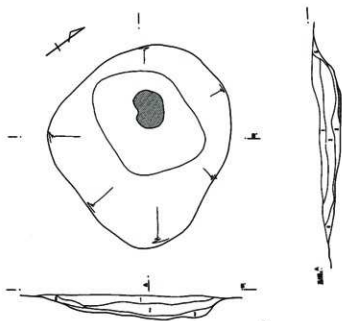


- 1層 遺構主体(中央部)の
壁面。
- 2層 土器に焼成する土
器の底。
- 3層 遺構主体(中央部)の
壁面(土器の底面)。
- 4層 遺構主体(中央部)の
壁面(土器の底面)。
- 5層 遺構主体(中央部)の
壁面(土器の底面)。
- 6層 遺構主体(中央部)の
壁面(土器の底面)。
- 7層 遺構主体(中央部)の
壁面(土器の底面)。
- 8層 遺構主体(中央部)の
壁面(土器の底面)。

0 1 m

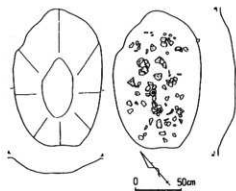


新開遺跡S b区2号窯

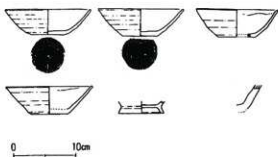


0 1 m

同T c区1号窯



0 50cm



0 10cm

本村北遺跡焼成坑

S b区2号窯・本村北遺跡焼成坑はほぼ平坦面に構築されていた。S b区2号窯は長径1.38m、深さ30cmの不整形であり、T c区1号窯は長径2.10m、深さ30cmの不整形円形、本村北遺跡焼成坑は長径1.46m、深さ15cmの楕円形である。大きさは森坂例に対して小さい。T c区1号窯・S b区2号窯には床面被熱範囲に偏りがあり、手前と奥の意識があったのではないかと指摘されている。

新形遺跡は、東金子窯跡群・末野窯跡群と異なり、新しい段階に須恵器生産が始まった遺跡であるためか、土器焼成遺構と粘土採掘坑が重複する傾向はあまり顕著ではないようである。

第3に、大宮市御蔵山中遺跡(渡辺・宮崎 1989、渡辺 1992)である。この遺跡は大宮台地の南部でやや大きい沼に面した台地平坦面から緩斜面にかけて立地している。土器焼成遺構は緩斜面に位置していた。第1次調査で第8号土壌・第13号土壌、第2次調査で第52号土壌・第53号土壌が検出された。第8号土壌は長径1.23m、深さ24cmの不整形ないし不整形円形、第13号土壌は長径1.88m、深さ39cmの楕円形、第52号土壌は長径1.68mの倒卵形、第53号土壌は長径2.48m、深さ18cmの不整形である。

この遺跡では土器焼成遺構は4基確認されているが、あまり集中しておらず、大型で台形という第53号土壌を別とすれば円形・楕円形志向で、通常の例とあまり変わらない。2m前後の平面規模も同様である。

むしろ、出土品が多いために、東金子・末野窯跡群近傍の土器焼成遺構と異なる土器様相であることが目立つ。すなわち、ロクロ土器器坏は高台を持たないものが主体で内黒土器になっている。甕はコの字状口縁甕の変化したものはあるかもしれないが、口唇部が内面に肥厚する形態をとっており、あるいは下総・常陸地域との類似性を考えるべきかもしれない。やはり、床面被熱範囲には偏りがあり、焼成に関する方向性が認識されていたと思われる。

第4に、大宮市東北原遺跡例(山口 1981、宮崎 1993)である。この遺跡は縄文時代後・晩期の遺跡と

して有名な遺跡であり、綾瀬川と芝川に挟まれた台地上に立地する。第5次調査と第9次調査で土器焼成遺構が確認された。第5次調査では土器焼成遺構は1基だけで、ほぼ同時期と思われる7基の土壌とともに確認されており、緩斜面に所在していた。第9次調査では4基確認されたが、調査区の関係で長径が不明のものが多く、第5次の第2号土壌は長径1.30m、深さ31cmの楕円形、第9次調査の第36号土壌は短径1.95m、深さ30cm、第37号土壌は短径1.88m、深さ35cmの楕円形と考えられる。

第2号土壌は床面全体と南壁が被熱しており、第37号土壌も床面全体が被熱している。

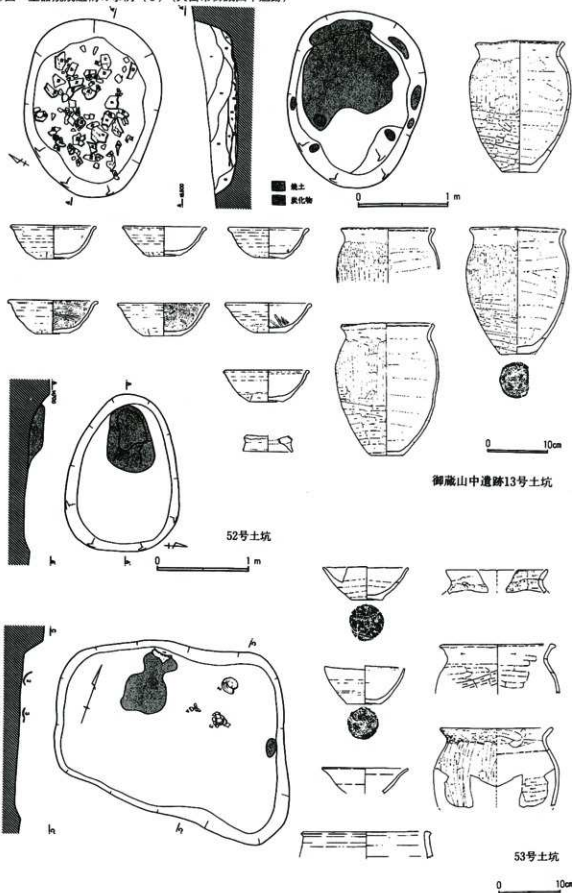
この遺跡においても、土器焼成遺構はやや散在的に分布しており、土器様相も御蔵山中遺跡と同様であった。

第5に、浦和市和北遺跡例(小倉 1982)である。この遺跡は大宮台地南端部に近い台地上の平坦面から東側緩斜面にかけて立地している。土器焼成遺構は、緩斜面に第2号土壌1基のみが所在し、縄文時代早期の炉穴と重複して確認された。この遺跡では、ほぼ同時期の住居跡4軒が検出されているため、土器焼成遺構は集落跡の一隅にあったと考えてよい。また、1軒の住居跡の床面中央にロクロを据えたと思われるピットが確認された。長径1.70m、深さ30cmの楕円形の土壌であり、床面被熱部分は短軸方向の南にやや偏る。やや足高台風の高台付坏が出土している。

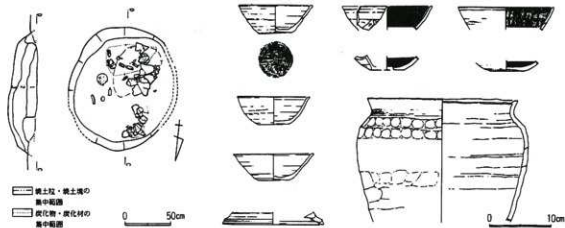
これら5遺跡の例からは、「B類焼成坑」と呼ばれる遺構の共通点として、①丘陵・台地の緩斜面ないし平坦面に位置すること、②おおむね円形・楕円形の形態を志向し、焼成面と考えられる被熱痕跡はやや偏った位置に認められる、③時期的には大型窯跡群の衰退期にあっている、等を指摘できる。

①については、埼玉県域の平安時代遺跡が丘陵・台地に分布することから平均的に考えられることであり、土器焼成遺構に風が送り込まれやすい環境としての条件となっているのであろう。これは、通常の須恵器窯跡が丘陵斜面を掘り抜いて窯を構築して還元炎焼

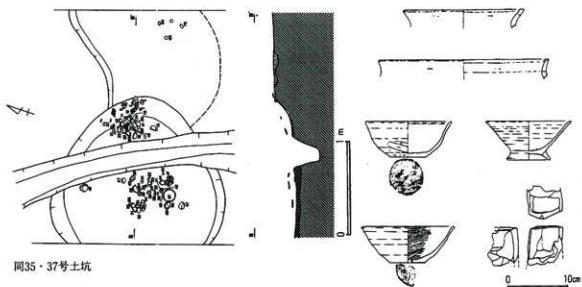
第60図 土器焼成遺構の事例(3)(大宮市御蔵山中遺跡)



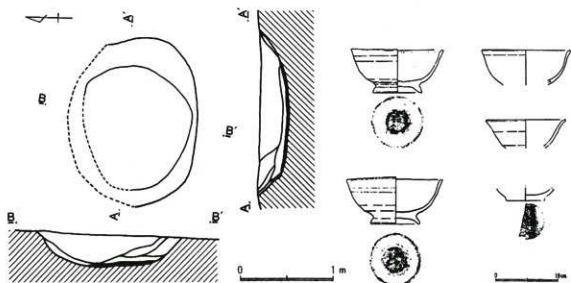
第61図 土器焼成遺構の事例(4) (大宮市東北原遺跡・浦和市和田北遺跡)



東北原遺跡2号土坑



同35・37号土坑



和田北遺跡2号土坑

成を行うのと比較して、もはや酸化炭素によって土器焼成することが常識化している段階の遺構であることを想起すべきであろう。

②も、熱効率や燃料・土器の配置のしかた等の焼成技術上からもっぱら選択された状況と考えたい。

③は、①について述べたことにも関連するのであるが、この種の遺構で土器生産が細々と継続していくのが、一つの時代的要請にもとづくことが明らかであるということである。

ところで、遺構の規模の面では、4 mを超えるものから1 m強の大きさのものまで変異の幅が大きい。大きめのものと小さめのものの双方が存在する遺跡もある。しかも、窯跡群近接の土器焼成遺構でも大きめのものも小さめのものもあることがわかる。これは、おそらく注文してくる消費者の数、つまり需要の多寡に関連する可能性があるのではないかと思う。

また、埼玉県では、千葉県永吉台遺跡や栃木県八幡根東遺跡のように単一の集落遺跡で多数の土器焼成遺構を検出した遺跡が知られていない。これは、かなり遅い段階まで通常の窯跡による須恵器生産が継続しているためと考えることができそうである。そのため、折原石道遺跡や森坂遺跡のように、粘土採掘坑と土器焼成遺構が重複して存在する、まさに古代窯業生産の延長線上に位置付けられる遺跡が少なからず存在するわけであり、同様なことは東京都の南多摩窯跡群山野短大校内遺跡や多摩・ニュータウンNo.304遺跡の土器焼成遺構も同じ事情で把握することができよう。

富田氏が述べる「須恵器窯跡群の解体とロクロ土器器焼成坑の成立が無関係にないこと、寧ろ軌を一にした一連の動きの中で成立したことを示すもの」という認識は大筋では正しいと思われるが、須恵器窯跡群が本当に解体してしまう時期は武蔵北部の土器焼成遺構成立期よりは若干遅いのではないだろうか。

また、今後検討を要することであるが、寄居町核沢窯跡の土器様相は、荒川対岸の折原窯跡とはほぼ同じである。前者はすでに平地に降りた地点で「平地の窯」を構築し、「里の須恵器」を焼いているわけであるが、

後者はいまだ丘陵の一角で伝統的に傾斜地の窯を築いて、「山の須恵器」を焼いている。器形・製作技法では共通しながら、前者では大部分が酸化炭素焼成でロクロ土器の初期的なものになっているにもかかわらず、後者は還元炭焼成の伝統的な須恵器なのである。第二章でも触れたが、荒川右岸の少し下流に行った川本町如意遺跡でも、寄居町核沢窯跡に類似する平地の須恵器窯跡が調査されており、末野窯跡群に関する限りは、9世紀末ないし10世紀初頭の段階にあってもまだ「拡散期」なのであり、窯跡群の正確な終焉の時期を把握できているかどうかは明確とはいえない。これを末野窯跡群の特性と見るよりは、むしろ各窯跡群の周辺で土器焼成遺構が展開する遺跡がまだあまり確認されていないと考えた方がよいと思う。

もう1点、書上氏も富田氏も大宮台地の土器焼成遺構成立の背景として下総方面の遺跡の影響を考えるが、その立論の根拠になっているのは、御蔵山中遺跡・東北原遺跡の土器様相が下総のロクロ土器に類似することにはかならない。

これらの出自を実際に下総のロクロ土器生産に求めることについては、全面的賛成はいたしかねる。以下にこの点について若干の私見を述べておく。

房総地域一帯にはやや高さのある台地の地形が広がっており、須恵器窯跡を構築できる良好な丘陵が不足しており、代表的な窯跡群であっても比較的短期間の操業しか確認できず、窯跡の数も関東西部の丘陵地帯に比べて圧倒的に少ないと予想される。このような須恵器生産に適しない地形的条件にあっても、同様な効果の得られる焼き物を開発した結果が、奈良時代以降に顕在化してくるこの地域のロクロ土器の盛行であると思われる。

ロクロ土器の初発が早いということは、それだけ周辺地域に影響を及ぼすのもかなり早い段階からと考えるのが正しいと思われ、栃木県小山市八幡根東遺跡の8世紀後半から9世紀後半までの土器群のうち、土器製作手法や器形が下総・常陸に関連付けられる個体はかなりの数にのぼっていると見られる事実がある。

さらに、古代では下総領域に属していたかもしれないが、大宮市域までわずか15km程度しか距離がない春日部市八木崎遺跡の春日部高校校庭調査区や小湍山下遺跡等の春日部市域の奈良・平安時代の集落跡において、茨城県域の三和窯跡群・新治窯跡群、栃木県域の三壺山麓窯跡群の製品が数多く供給されていることも確認されつつある。

ところで、房総地域では、ロクロ土器を焼成したと思われる遺構が検出された遺跡の分布は現在県内全域に広がっているが、埼玉県域に近い東葛飾郡地域には見つかっておらず、最も近いものでも八千代市権現

後遺跡・白幡前遺跡であり、その次に近いものでは千葉市駒形遺跡になってしまう。

これらの事実を踏まえて考えれば、大宮・浦和市域等の大宮台地上の土器焼成遺構の出自は、わざわざ千葉・八千代市域のような遠方まで考慮しなくても、埼玉県域により近い、下野・常陸の土器生産の様相から考えることができるかもしれない。もちろん、現在はまだ資料的に十分ではなく、実物に基づく考証では下総地域出自論優勢であるのは変わらないが、可能性の範囲としては、下野・常陸地域出自論を十分考慮すべきではないだろうか。

参 考 文 献

- 赤船浩一 1996 「寄居町末野遺跡の調査」『第29回遺跡発掘調査報告会発表要旨』 埼玉考古学会他
- 浅野晴樹・石岡憲雄・高橋一夫・梅沢太久夫 1980 「埼玉における古代窯業の発達(2)」『研究紀要』第2号 埼玉県立歴史資料館
- 石岡憲雄・高橋一夫・梅沢太久夫 1979 「埼玉における古代窯業の発達(1)」『研究紀要』第1号 埼玉県立歴史資料館
- 石塚三夫 1994 『町内遺跡1 末野窯跡群第9支群・むじな塚遺跡(第8次)・むじな塚遺跡(第9次)・中芝遺跡(第2次)・末野遺跡(第2次)』寄居町文化財調査報告第12集 寄居町教育委員会
- 石塚三夫 1994 『中小前田1遺跡』寄居町遺跡調査会報告第1集 寄居町遺跡調査会
- 石塚三夫 1995 『町内遺跡2 東件場地遺跡(第2次)・中小前田1遺跡(第5次)・東件場地遺跡(第3次)・東件場地遺跡(第4次)』寄居町文化財調査報告第13集 寄居町教育委員会
- 石塚三夫 1995 『町内遺跡3 東国寺東遺跡(第3次)・増善寺遺跡(第3次)・むじな塚遺跡(第7次)』寄居町文化財調査報告第14集 寄居町教育委員会
- 石塚三夫 1996 『町内遺跡4 用土前峯遺跡(第4次)・上寺遺跡(第1次)』寄居町文化財調査報告第15集 寄居町教育委員会
- 石塚三夫 1996 『用土北沢遺跡』寄居町文化財調査報告第16集 寄居町教育委員会
- 石塚三夫 1996 『伊勢原遺跡』寄居町遺跡調査会報告第6集 寄居町遺跡調査会
- 石塚三夫 1996 『用土前峯遺跡(第2次)・(第3次)』寄居町遺跡調査会報告第8集 寄居町遺跡調査会
- 石塚三夫 1996 『末野元宿遺跡』寄居町遺跡調査会報告第9集 寄居町遺跡調査会
- 石塚三夫 1996 『中小前田1遺跡(第2次)』寄居町遺跡調査会報告第11集 寄居町遺跡調査会
- 石塚三夫 1997 『灰田原遺跡』寄居町遺跡調査会報告第13集 寄居町遺跡調査会
- 石塚三夫・田代康宏 1994 『薬師台遺跡・大正寺南遺跡』寄居町遺跡調査会報告第2集 寄居町遺跡調査会
- 石塚三夫・田代康宏 1997 『中小前田2遺跡(第4次)(第5次)・小前田3号墳』寄居町遺跡調査会報告第14集 寄居町遺跡調査会
- 市川 修他 1976 『田中前遺跡』埼玉県遺跡調査会報告書第32集 埼玉県遺跡調査会
- 市川 修他 1983 『塚屋・北塚屋』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第25集(財)埼玉県埋蔵文化財調査事業団
- 井上尚明 1996 『大町遺跡』寄居町遺跡調査会報告第5集 寄居町遺跡調査会
- 井上尚明 1996 『むじな塚遺跡(第4次調査)』寄居町遺跡調査会報告第10集 寄居町遺跡調査会
- 井上尚明 1997 『露梨子遺跡(第2次調査)』寄居町遺跡調査会報告第12集 寄居町遺跡調査会
- 井上尚明・石塚三夫 1995 『東件場地遺跡(第5次)』寄居町遺跡調査会報告第3集 寄居町遺跡調査会
- 井上尚明・石塚三夫 1995 『普光寺東遺跡(第2・3次)』寄居町遺跡調査会報告第4集 寄居町遺跡調査会
- 井上 肇・井上尚明 1996 『甘粕原遺跡』寄居町遺跡調査会報告第7集 寄居町遺跡調査会
- 今関久夫 1984 「寄居町折原窯跡の調査」『第17回遺跡発掘調査報告会発表要旨』 埼玉考古学会他
- 今関久夫 1990 『むじな塚遺跡群』寄居町文化財調査報告第8集 寄居町遺跡調査会
- 今関久夫 1991 『庚申塚遺跡群』寄居町文化財調査報告第9集 寄居町教育委員会
- 今関久夫・石塚三夫 1993 『東国寺東・増善寺遺跡』寄居町文化財調査報告第11集 寄居町教育委員会
- 今関久夫・石塚三夫 1994 『大正寺遺跡』寄居町文化財調査報告第10集 寄居町教育委員会

- 丑野 毅 1984 「寄居町用土平遺跡の調査」『第17回遺跡発掘調査報告会発表要旨』 埼玉考古学会
 梅沢太久夫 1973 『東遺跡』寄居町文化財調査報告書 寄居町教育委員会
 大里都市担当者会 1992 「大里地域の遺跡Ⅰ」『埼玉考古』第29号 埼玉考古学会
 大里都市担当者会 1993 「大里地域の遺跡Ⅱ-奈良・平安時代の大里地域-」『埼玉考古』第30号 埼玉考古学会
 小川貴司・橋本博文 1980 「土器の分類と編年」『大久保山Ⅰ』早稲田大学本庄校地文化財調査報告1 早稲田大学本庄校地文化財調査室
 小倉 均 1982 『井沼方・大北・和田北・西谷・吉場遺跡発掘調査報告書』浦和市遺跡調査会報告書第20集 浦和市教育委員会
 書上元博他 1996 『八木上/八木/八木前/上広瀬北/森坂北/森坂』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第165集 (財)埼玉県埋蔵文化財調査事業団
 小林 高 1997 『町内遺跡5 赤浜天神沢遺跡 (第1次)・赤浜天神沢遺跡 (第2次)・露梨子遺跡 (第3次)』寄居町文化財調査報告第17集 寄居町教育委員会
 埼玉県 1980 『新編 埼玉県史 資料編1 原始 旧石器・縄文』
 埼玉県 1982 『新編 埼玉県史 資料編2 原始・古代 弥生・古墳』
 埼玉県 1984 『新編 埼玉県史 資料編3 古代1 奈良・平安』
 斎藤孝正 1994 「東海地方の施釉陶器生産-猿投窯を中心に-」『古代の土器研究-律令的土器様式の西・東3施釉陶器-』古代の土器研究会第3回シンポジウム 古代の土器研究会
 酒井清治 1987 「埼玉県の須恵器の変遷について」『埼玉の古代窯業調査報告書』 埼玉県立歴史資料館
 酒井清治 1987 「武蔵国における須恵器年代の再検討」『研究紀要』第9号 埼玉県立歴史資料館
 酒井清治他 1984 『台耕地 (Ⅱ)』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第33集 (財)埼玉県埋蔵文化財調査事業団
 坂詰秀一他 1971 『武蔵新久窯跡』 雄山閣出版
 佐藤博之・永井智教 1997 「寄居町馬騎の内庵寺採集の瓦について」『土曜考古』第21号 土曜考古学研究会
 鈴木孝之 1995 「寄居町末野遺跡の調査」『第27回遺跡発掘調査報告会発表要旨』 埼玉考古学会他
 鈴木敏昭・黒坂禎二・西井幸雄・小島(斎藤)糸子 1985 『北塚屋 (Ⅱ)』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第48集 (財)埼玉県埋蔵文化財調査事業団
 鈴木徳雄 1983 「古代北武蔵における土器器製作手法の画期」『土曜考古』第7号 土曜考古学研究会
 鈴木徳雄 1984 「いわゆる北武蔵系土器器坏の動態-古代武蔵国における土器器生産と交易-」『土曜考古』第9号 土曜考古学研究会
 鈴木徳雄・坂本和俊・坂野和信他 『金屋遺跡群』児玉町文化財調査報告書第2集 児玉町教育委員会
 鈴木徳雄・市川淳子他 1983 『阿知越遺跡Ⅰ』児玉町文化財調査報告書第3集 児玉町教育委員会
 鈴木徳雄・市川淳子他 1984 『阿知越遺跡Ⅱ』児玉町文化財調査報告書第4集 児玉町教育委員会
 鈴木秀雄・富田和夫 1982 『伴Ⅵ』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第11集 (財)埼玉県埋蔵文化財調査事業団
 高木義和他 1978 『南藤田・井の岡遺跡』寄居町文化財調査報告第3集 寄居町教育委員会
 高木義和他 1981 『南藤田遺跡』寄居町文化財調査報告第5集 寄居町教育委員会
 高木義和他 1982 『東国寺東・平倉遺跡』寄居町文化財調査報告書第7集 寄居町教育委員会
 高橋一夫 1987 「北武蔵における古代寺院の成立と展開」『埼玉の考古学』柳田敏司先生選題記念論文集刊行会
 新人物往来社

- 高橋一夫 1994 「荒川北岸の古代寺院」『渡来人と仏教信仰—武蔵国寺内廃寺をめぐって』柳田敏司・森田 梯編
雄山閣出版
- 高橋一夫・大江正行・有吉重蔵・坂野和信他 1984 「シンポジウム 北武蔵の古代寺院と瓦」『埼玉考古』第22号
埼玉考古学会
- 高橋一夫・宮 昌之 1982 「寄居町馬騎の内廃寺」『埼玉県古代寺院跡調査報告書』埼玉県県民部歴史編さん室
- 齋瀬芳之 1986 『小前田古墳群』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第58集(財)埼玉県埋蔵文化財調査事業団
- 田中広明・末木啓介他 1997 『中堀遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第190集(財)埼玉県埋蔵文化財調査
事業団
- 谷井 彪他 1987 『埼玉の古代窯業調査報告書』埼玉県立歴史資料館
- 津野 仁・亀田幸久・内山敏行 1997 「栃木県八幡根東遺跡の土器焼成坑」『古代の土師器生産と焼成遺構』窯
跡研究会
- 利根川章彦他 1994 『埼玉県古墳詳細分布調査報告書』埼玉県教育委員会
- 富田和夫 1997 「関東西部—武蔵国を中心に—」『古代の土師器生産と焼成遺構』窯跡研究会
- 中島利治・梅沢太久夫・高橋一夫他 1984 『寄居町史 原始・古代・中世資料編』寄居町教育委員会
- 中島利治・梅沢太久夫・高橋一夫他 1986 『寄居町史 通史編』寄居町教育委員会
- 並木 隆他 1977 『甘粕原・ゴシン・露梨子遺跡』埼玉県遺跡調査会報告書第35集 埼玉県遺跡調査会
- 西井幸雄他 1997 『埼玉考古 別冊第5号 特集号 埼玉の旧石器時代』埼玉考古学会
- 野部徳秋・高木義和 1977 『末野窯址(花園支群)発掘調査』寄居町文化財調査報告第2集 寄居町教育委員会
- 野部徳秋・高木義和・笠原信男・栗島義明 1981 『船荷窪遺跡』寄居町文化財調査報告第5集 寄居町教育委員会
- 半澤幹雄 1997 「関東東部—千葉県内の事例を中心に—」『古代の土師器生産と焼成遺構』窯跡研究会
- 伴瀬宗一 1998 『栗山城跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第221集(財)埼玉県埋蔵文化財調査事業団
- 昼間孝志 1997 「武蔵国」『シンポジウム 関東の初期寺院 資料編』関東古瓦研究会
- 昼間孝志他 1994 『桜沢窯跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第143集(財)埼玉県埋蔵文化財調査事業団
- 昼間孝志・宮 昌之他 1986 「北武蔵における古瓦の基礎的研究Ⅰ」『研究紀要 1986』(財)埼玉県埋蔵文化財調
査事業団
- 福田 聖他 1998 『末野遺跡Ⅰ』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第196集(財)埼玉県埋蔵文化財調査事業団
- 細田 勝・岩田明広 1994 『樋ノ下遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第135集(財)埼玉県埋蔵文化財調
査事業団
- 松本富雄 1983 『町東部遺跡群発掘調査報告書』三芳町教育委員会
- 宮 昌之 1992 「埼玉県における古代瓦の諸問題(Ⅰ)」『研究紀要』第14号 埼玉県立歴史資料館
- 宮崎朝雄・島村範久・細田 勝 1982 『増善寺遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第5集(財)埼玉県埋
蔵文化財調査事業団
- 宮崎由利江 1993 『深作船荷台遺跡・東北原遺跡—第9次調査—』大宮市遺跡調査会報告第40集 大宮市遺跡調
査会
- 望月精司 1997 「土師器焼成坑の分類」『古代の土師器生産と焼成遺構』窯跡研究会
- 柳井章宏 1989 『新開遺跡—Tc区の調査』三芳町教育委員会
- 柳井章宏 1993 『新開第二遺跡発掘調査報告書』三芳町教育委員会

- 山口康行 1981 『東北原遺跡-第5次調査』大宮市遺跡調査会報告第2集 大宮市遺跡調査会
- 大和 修・今井 宏・駒宮史朗・鈴木仁子 1982 『沼下・平原・新堀・中山・お金塚・中井丘・鶴巻・水久保・猪久保遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第16集(財)埼玉県埋蔵文化財調査事業団
- 横川好富・増田逸朗・駒宮史朗他 1980 『甘粕山』埼玉県遺跡発掘調査報告書第30集 埼玉県教育委員会
- 横川好富・駒宮史朗・宮崎朝雄・宮崎由利江他 1978 『中堀・耕安地・久城前』埼玉県遺跡発掘調査報告書第15集 埼玉県教育委員会
- 渡辺正人 1992 『御藏山中遺跡Ⅱ』大宮市遺跡調査会報告第33集 大宮市遺跡調査会
- 渡辺正人・宮崎由利江 1989 『御藏山中遺跡-I-』大宮市遺跡調査会報告第26集 大宮市遺跡調査会